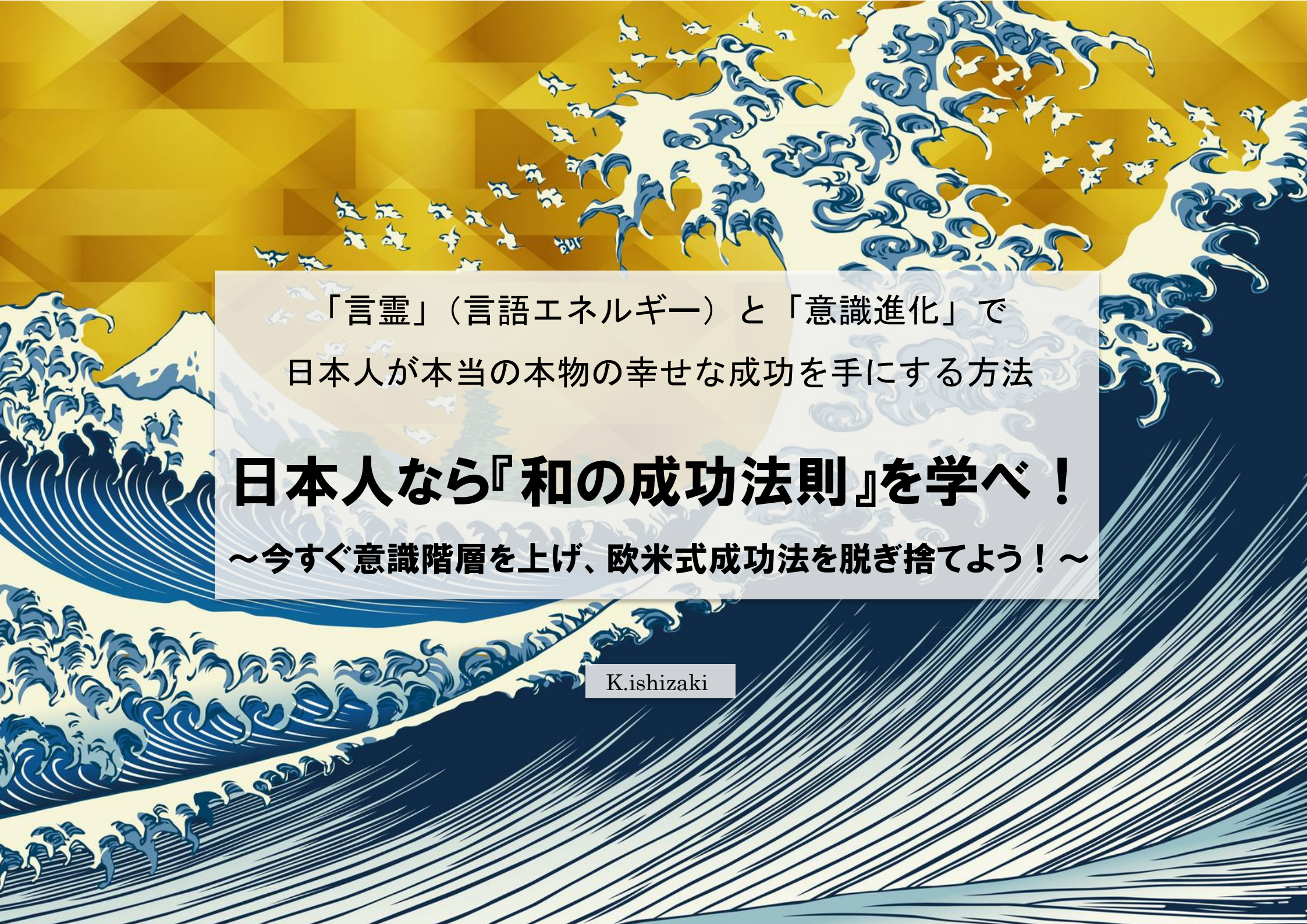




「言霊」（言語エネルギー）と「意識進化」で
日本人が本当の本物の幸せな成功を手にする方法

日本人なら『和の成功法則』を学べ！

～今すぐ意識階層を上げ、欧米式成功法を脱ぎ捨てよう！～

K.ishizaki

和の成功法則・提唱者 石崎純一（いしざき・けんいち）

ビジネス・ディベロッパ。1968年生まれ。三重県出身。

リクルート、外資系金融機関エージェント、上場コンサルティング会社などでの経験を活かし、業種業態にとらわれず、時代に連動したビジネスの第一線で活躍。（27歳で起業、現在19年目）銀行系クレジットカード加盟店開拓代行事業、日本初の光脱毛店の展開、オンデマンドカラー印刷事業、店舗評価システムの構築、海外ロングステイ事業、FXスクール、全国展開のメディカルエステティックの社長、上場企業役員としての株式公開経験、証券会社役員など、様々なビジネスの経験を持ち、インターネットの力を借りずとも30代前半で収入と資産が億単位に到達。

ビジネスプロデューサーとしてもクライアントが行列を作り、芸能人御用達の予約の取れないサロンのプロデューサーや様々な日本初のビジネスへの参入など、常に時代の先を見据えたアプローチを展開。現在まで立上げ・関与した事業は40種類にも及ぶ。

また、ビジネス面だけでなく、国際セラピストトレーニング協会（ITTO）、国際催眠連盟（IHF）といった心理療法の国際資格も有し、心理、言語エネルギー運用、インテグラル理論、NLP、成功哲学といった心の領域への造詣も深く、開催したセミナーは常に満席。人生での数多くの失敗、挫折、そして成功の豊富な経験から、「ビジネスや成功の実現は、心の創造と成長が必要である」と確信。現在は、優位性と長期安定&心のワークに裏付けられた“エメラルドオーシャンビジネス”を提唱。ライフワークとして、世界と日本の架け橋となる秀逸なプロダクトやビジネスモデルの発掘を手掛けるかたわら、数々の事業組織の役員やオーナーとして複数の資産型ビジネスを保有。国内と海外を行き来する自由なライフスタイルを送る。

起業家やスモールビジネスの経営者が夢を持って事業に取り組み、自己の実現と社会への貢献を両立できる環境を日本に根付かせるため、「エメラルド・オーシャンビジネス」の普及ならびに実践者を育成する活動を行い、2013年4月からはじめた『エメラルド・オーシャンビジネス・マスターズ・0期、1期』及び、今回の前身企画である、『和の成功法則 ザ・ワープ1期』は大成に終わった。

2015年からは、その使命に基づき、人生のありようも「エメラルド・オーシャンであれ」を掲げ、世界最先端の言語エネルギー研究機関・N研究所とパートナーシップを組み、起業家、経営者、ビジネスパーソンを、利益追求の欧米流の成功の概念から、

日本人に最適な公の成功へと意識を進化・拡大させ、意識界のリーダーを輩出する、「和の成功法則」プロジェクトをスタートさせる。

はじめに

僕は、今、タイのサムイ島に滞在している。フライト前に、あるビジネス件をまとめあげ、多額の収益を確保した上で、この島に滞在することができる。

数年に一度、僕はこの島にリトリート（日常生活を離れ、自分だけの時間に浸ること）に訪れている。この島はテレビでも有名なN女医が、「今まで行った外国の中で一番良かった」と過去言っていた島でもあり、僕もこの島には何度か訪れてはいるが最もリラックスできる場所の一つだ。

日本での様々な情報や責任、やるべきことから離れて、自分の意識を整えることはとても大切なことだと考えている。淡いエメラルドグリーンの海を横目に見ながら、時折シンハービールを口にしながら、こうして原稿を書いたり、これからのことをぼんやり考えたりもしていると、本当に穏やかでラグジュアリーな時間を感じることができる。

さて、この冊子を手にとっていたあなた、あなた”に対して、僕なりの自己紹介をさせていただこう。

僕は27歳の時に会社から給料をいただく生き方を捨てて、自分で稼ぐという道を選んだ。つまり起業をした。あれから19年の年月が流れ、今は複数のビジネスオーナーや役員をしながら、人の生き方や意識レベルの向上に自分の時間とエネルギーを割いていこうと本腰を入れている。

道しるべを失った日本では、主に欧米から入って来た自己啓発や成功法則、スピリチュアルなどに興味を持つ人が年々増加している。しかし、それらのほとんどは「個」の階層からの成功を試みているものであったり、「天使」や「ハイヤーセルフ」「インナーチャイルド」などと繋がり、そのエネルギーの支援を受けて、より良き自分を創造しようとするものがほとんどである。はつきり断言するが、これらの階層に意識を置いている限り、真の人生の展開

はない。僕は、『言霊』の学びを通じて、あえてそう断言する。

これらのものに触れて来られた人も、成功や人生は自分で掴み取るものであると信じて疑わない人、あるいは唯物論的な人も含め、古来から日本に連綿と継承されてきた、『言霊』の学びを得ることで、この世(宇宙)の仕組み、人間の仕組み、自分の真の成功が理解できることも断言しておきたい。

僕のこの言葉に対し、人それぞれの主観において、どのような取り方もできるとは思うが、前身企画である、和の成功法則『ザ・ワープ』では、主催者を驚かすほどの多くの人達が参加し、その、ほとんどの方が今も学びを継続していることからして、その叡智の純度をお察しいただければ幸いである。

会社経営者、医師、治療家、セラピスト、海外在住者など、多くの人達が、この叡智を活用し、ご自身のライフフィールドで活用され、大きな成果を得られていることも付け加えておきたい。「はじめに」で、あえて触れさせていただいた、「フライト前に、あるビジネス案件をまとめあげ、多額の収益を確保した上で」といったようなことも、言霊を理解し、正しく運用すれば、日常のごとく起きてくることであり、僕が極めて優秀なビジネスパーソンというわけではないのだ。

ここからは勇氣を持ってお伝えしようと思うが、欧米系の成功法則や自己実現方法、スピリチュアルコンテンツでは、日本人、すなわち『和の民族』である我々には、その効果を得ることが難しいということを知っておいていただきたい。とはいえ、国歌「君が代」が祓いの詩(うた)であることすら知らず、天皇賛美の歌であると思っている人が大多数の今の日本人には、すべてにおいて不感症になっているのであるから無理からぬことでもあるが。

これから話を始めるにあたり、あなたがどう否定しようと、太古からの日本人のDNAが息づき、日本語「あいいうえお」を話す民族であることに意義はないはずである。この二つのものが、あなたの心身に刻み込まれているならば、主観を捨て、この先を読んでいただきたいと願いたい。

ところで実は僕も、欧米系のプログラムや書籍、セミナーの信奉者であつ

た。さらに、ある時に人生最大の危機が訪れ、スピリチュアルに逃避したこともある。19歳の頃に、「マーフイーの法則」に出会い、潜在意識を活用すれば成功するという概念を初めて知った。その後、22歳のときに総額150万円はする、海外が本部の能力開発プログラムをローンで購入した。その後も定期的に、この手の流れの本や勉強会、セミナーなどで学び、僕が費やしたお金は軽く1000万円は下らないだろう。人生に危機が訪れたときは、スピリチュアルセミナーへの参加はもとより、複数の有名占い師、霊能者を頼ったこともある。

金額や行動はどうであれ、それほどまでも僕は人生で成功をしたかったのだ。そして、危機が訪れたときは、見えないものにすがろうとしたのである。

果たして今、僕は「成功」しているのだろうか？ 俗に言われる「勝ち組」なのであるか？

現在、家を2軒所有し、車は6台（うち5台は外国車である）、船も一艘。他にも海辺のビーチハウスや名古屋市市内の一等地にも、今後事務所をつくるための土地を所有している。さらに自己所有の店舗が2軒、その他店舗が7軒、うち1軒はJRの商業ビルにある。そして8つのビジネスのオーナーであり、これらのどのビジネスに対しても出勤をしてもいない。つまり、平日にも関わらず、南の島に滞在できる、流行の「経済自由人」でもある。

上場企業の創業者や世界的に活躍する人など、上には上がいるのは当然だが、今の状況でも、ほどほどのレベルの「勝ち組」なのかも知れない。そして、このブースターとなったのは、ある時期までは西洋系（主にアメリカ系）の自己啓発や成功法則だ。

従って、こういった学びの効用を十分知る身でもある。

しかし、そんな僕が、世の中で行われている多くの「自己啓発」や「成功法則」「願望実現法」「引寄せの方法」などに対して違和感を感じている。

「それらは本当に人間の人生を幸せに導くものなのか？」

「日本人が人生の本当の成功者になるために適したものなのか？」

それは、ある時期に、僕のマインドを変化させざるを得なかったことに起因する。

僕は、欧米系の自己啓発や成功哲学を20代前半からこの身に叩き込み、常に「成功」や「稼ぐ」という行為を意識して生きてきたのだ。結果、通信制大学卒業という学歴でありながらも、株式公開企業の役員や証券会社役員といった分りやすいものから、世界的に知名度のあったドクターと組んだベンチャー企業社長といったポジション、老舗外資系企業のA社からのヘッドハンティングなどを経験することができた。また、27歳で独立してから、ほぼ苦勞することなくビジネスは順調に推移し、30代のある時期には、この身に余るほどの大金を稼ぐことができてしまったのだ。

当時は、若いベンチャー起業家が株式公開で一山当てる風潮や投資運用で一氣に資産を構築しようとする最高潮に達していた時期でもあり、僕もその流れを存分に意識し、稼いだお金を原資に一氣に資産を構築してしまおうという行動に打って出ていたのである。資金運用はもちろん、これとは思ったビジネスにお金を投入しまくったのである。そして、このアクションは、上手く行きかけたかに見えた。バーチャル上の僕の資産は数億円を超えはじめ、次はその資産をオフショアのタックスヘイブン会社を通じて、年利20%くらいは狙えるであろう、オルタナティブ・ファンドなどで安定運用をしながら、不労で年収6000万円（月収500万円）くらいは確保しようと計画を進めていった。

しかし、その先に待っていたのは漆黒の闇であった。

この話も本文に譲ることにするが、僕は負の迷宮に迷い込んでしまったのだ。決して、そこから脱出することができないであろうレベルの迷宮であり、欧米系の自己啓発や成功哲学、スピリチュアルの叡智などを徹底的に駆使・発動し続けても、僕の状況は変化するどころか、ますます負のスパイラルに落ちていったのである。

そんなときに、インドから来た、ある占い師（まだ17歳の少女であった）のところを訪ねたのだ。（この少女の超常能力は極めて高く、後に日本でも出版を果たしている）彼女は一定の所作の後、「あなたは神を怒らせた」という言葉とともに、僕が経験して来たことの、ほとんどを言い当ててしまったのである。

そして、さらに言葉が続いた。

「あなたは、これから数年間、大変な時期を過ごすことになります。しかし、一縷の望みもないわけではありません。この闇を抜け出すのは簡単ではありませんでん。でも、あなたの意識転換が起きれば抜け出せる可能性もないわけではありません」

え！ まだ、こんな闇のような時期が数年間も続くのか……。僕は、大いにショックを受けて落胆をした。

「意識転換・・・」

何だそれ、意味不明だよな。

占い師の言葉は、あまりにも抽象的で僕を救い導くようなものではなかった。当たり前であるが、その後、僕にその意識転換が急速に起きることになるうとは、つゆほども思っていなかったのは当然のことである。

断つておくが、これからの話をスピリチュアルなものにするつもりはない。僕は、まがいなりにも複数のビジネスを展開する事業家であり、かなりの現実主義者である。見えない世界はあるとは信じているが、おぼろげで再現性のないようなことを夢見て夢中になるような男でもない。20年間継続できる人が、0・3%しかいないとも言われている厳しいビジネスの世界で生き抜いてきている自負と倫理的思考は持ち合わせているつもりだ。

しかし、あえてこの本を書かなければならないという強い思いがある。それは、今までの西洋的自己啓発や成功法則を超えたところに、我が日本人は

一人でも多く到達しなければならないことに気付いたからである。

そのためには、目まぐるしいスピードで同時多発的に大量に情報が行き交う、このIT社会かつグローバル社会に身をおきながらも、一人ひとりが人生の真の意味を知り、「あることを悟る」ことが必要なのだ。

簡単にまとめると、「自己実現」を追い求める時代は終わったということだ。

僕は、俗世間にまみれた人間であり、今でも適度にお金も好きだし、酒も女も好きだ。こんな僕でも、この仕組みられた世界に気付き、個という意識レベルからの「幸せ」や「成功」といったレベルではないところに、真の人生が展開されていくことに気付くことができたのだ。

それは、1万年前の縄文の世から連綿と続く、我が日本にこそ、それをひも解く叡智があったのだ。多くの人々が、西洋系の人生コンテントに夢中になっている今、この時期にこそ、世に放たれるべき時が来たと確信している。

ビーチが目の前にあるサマイ島のホテルにて。

石崎 絢一

第一章

なぜ、この国はダメになったのか

人生を掴んだと思った瞬間

＋ついに資産5億円！

ほくそ笑んだバンコクからのフライト

「お互い、これで引退できますね」

「引退したら、穏やかに人生を楽しめますな・・・ハッハッハ」

今から10年程前、35歳の初夏の頃であっただろうか、僕と友人はバンコクから日本への帰りの飛行機に乗っていた。1週間ほどタイに滞在して十分楽しんだ後、帰りのフライトでの会話である。

当時の僕と友人は、ある特殊なフアンドにお金を投資していた。このフアンドであるが、利権構造に特殊なポジションで入り込んでいた某氏が立ち上げたもので、すでに十年近く運用が回っていたものである。僕も友人もすでに数年間、このフアンドでお金を運用していたため、すっかり某氏を信用し（某氏は実際に信用に値するほどの人間的魅力もあり、集まっている人達も特別な地位にある人達ばかりであった）稼いだお金をどんどん運用に回していたのだ。

投資金額はどんどん膨らんで行き、このフライトの時点で僕の運用額は数億円に達し、友人も億の資金に達していた。

僕は運用した資金が5億円になった時点で、このファンドから3億円ほど抜き出し、オフショアのカンパニーから海外ファンドで運用する計画を立てており、その準備もほぼ終えていた。某氏のファンドは、信用こそしていたものの、実際どのような方法で運用されているのかが不透明であったため、やはり心のどこかでは不安でもあったのだ。

そのため、運用方法が明確であり、運用母体も明らかな海外ファンドに移行すべきであると判断したのだ。(日本での運用では、ほとんどのケースで年利数%程度しか見込めず、不動産投資にしても人口減少を迎えていく日本においては、世の中に溢れている「大家さん本」を見ても食指が動かされなかったのである) 資産5億円のうち3億円を海外ファンドで20%程度の利回りで回せば、計算上は年収6000万円になる。しかも不労である。

こうなってしまうえば、僕はもはや働く必要性はなく、毎日好きなことをしたり、のんびりしながら穏やかに生きることができたのだ。つまり、リタイアが可能だということ。そして、もうその状態が目と鼻の先までやって来ていたのである。この状況は友人とて同じであった。彼も目的額にも近づいていたのだ。

こうして僕らは、人生を掴んだと思い込んでいた。

こうして、僕らのミッドナイト・フライトは、ほろ酔い気分で、どこまでも明るく未来が口を開けているという確信の下、愉快に続いていった。

この数ヶ月後に自分達の人生が暗転することを知る由もなかった。友達に至っては、この後10年以上に亘り、お金のことで苦しみ抜くことになってしまったのだ。これに対しては、後日談をお伝えしたい。

仕掛けられた人生を生きることには気付かぬ人々

†「経済自由人」という生き方に憑かれた日々

前項で、僕が5億円という資産を築き、その資金を運用することで、不労でリタイアできると信じ込んでいた話を書いたが、そもそもなぜ、そういった発想に至ってしまったのであろうか？

それは情報と世の中の流れによるところが多い。

朝起きると、一般的な行為としてテレビや新聞に目をやることが多いと思う。そこでは経済や凶悪事件、そしてスポーツのことなど、人の日常的関心事項を取りあげており、僕らの毎日は、そういった情報を受けて一日が始まっていく。

通勤電車の中では、中刷り広告から様々な情報刺激を受け、車のラジオからはニュースが流れる。パソコンを開くと、大量のメールが流れ込み、ここ数年前からは、肌身離さないスマートフォンに五月雨式にメールや Facebook、LINE などにメッセージが入り続ける。近年になってからは、自らもブログや Facebook、Twitter などを通じて発信もできてしまうわけだから、とても忙しくて、自分の心の声を静かに聞いている時間さえないのが現代日本人なのだ。

さて、情報である。

僕と友人がリタイアの妄想を描いていた、2003、4年頃、とにかくネ

ット証券を通じた投資や運用が流行っていた。特に新興株市場は誰もが勝てた時代でもあった。(FX取引が活況になるのは2005年以降) 当時はマネー雑誌を中心に、「普通の主婦が数億円稼いだ」といったような文字が頻繁に踊っていた。また、その数年前には、若いITベンチャー起業家のIPOラッシュが続き、一夜で巨万の富を得る若者の話題で埋め尽くされていた。

そんな時代背景にあった2003年、ある本が出版された。

本田健さんが書かれた、『ユダヤ人大富豪の教え』(大和書房)である。

ここには、ある新しい人生コンセプトが記されていた。

どんなに稼いでいても名誉を得ていても、自分の時間すら自由になれない中小企業経営者や医師、大企業のサラリーマンという「不自由人」という存在、そして、社会的には目立ってはいなくても、時間に拘束されることなく、十分なお金を生み出すことができる人、つまり、経済力もあり自由でもある、「経済自由人」という種類の人がいるという考え方だ。

僕は、この考え方に触れたときに、**「素晴らしい、これこそ僕が求めている生き方だ！」**と小躍りしたものだ。

その後、この「経済自由人」という考え方や、「セミリタイア」「プチリタイア」という言葉と概念が、あらゆるメディアで紹介されていき、数多くの日本人に影響を与えたのである。

この流れとして、「放ったらかしで(大金を)稼ぐ方法」や「ほぼ不労のサラリーマン大家さん」「ネットトレーダー」といった稼ぎ方、生き方のエッセンスが、今の日本に大量に出回っていることは、あなたも感じているはずだ。

ご多分に漏れず、僕自身、この「経済自由人」をいち早く目指そうという考え方に染まるのに、それほど時間はかからなかった。自分のビジネススキルやリソースを見つけ、あらゆる事業を精査した結果、海外のオフオシヨア

カンパニーから外国籍のオルタナティブ・ファンドで運用することがベストだと判断したのだった。

この頃しきりに、日本の国家財政が破綻する、デノミが起きる、預金封鎖が起きる。そのためには自分の資産を海外に避難させ、健全な運用実績を誇る外国籍のファンドで資金を運用するのがベストな選択である。ということが喧伝されていたため、僕もその考え方に傾注したのだった。

僕もそうであるが、人は無意識に世の中にある情報を選択しながら生きている。経済的な考え方以外のことも、仕事のやり方、道徳、習慣など、人が生きるための考え方なども、親や国、先生、会社（の社風）などの影響を受けているのだ。

そういう意味においても、自分の心の声を聞きながら本当に必要な情報や概念を取り入れ、また、自らの生き方をクリエイティブにデザインしながら生きることができているは、ほとんどいいのではないか。

僕たちの人生は、実は自分オリジナルで展開できているのではなく、かなりの部分において外部からの情報の影響に左右されているのだ。

幸せって何だろう？

↑ 幸せになりたいと誰もが願うけれど

「人は幸せにならなくてはならない」「人は幸せになるために生きている」
こういったフレーズをよく耳にする機会が多い。実際に、心地いい言葉であるが故に、誰もがこのフレーズに意義を唱えることは少ない。

仏教の浄土真宗の開祖、親鸞聖人の伝えには幸せには二種類あるという。

一つは、僕らが欲してやまない、「経済的に豊かでいたい」「素敵な異性を手に入れたい」「自慢できる家や車が欲しい」といった幸せ状態である。親鸞聖人曰く、これを『相対的幸福』というそうだ。そして、もう一つの幸せを、『絶対的幸福』というそうだ。簡単にいうと、この世に存在し、生きている中で、やがて訪れる死の無情をも包み込み、どんなことが起きようが、崩れない安心・満足・喜びを得られている意識状態という意味での幸せ感だ。

僕らが、この世の中で追いかけて回しているのは、『相対的幸福』であることは言うまでもないし、メディアも、この幸せ感を煽る。しかし、ここには大きな意識的な罣が仕込まれていることに気づく人は少ない。

僕らが叩き込まれている幸せ感は、戦後70年間ほどの幸せ感である。この源流は、イギリスに産業革命が起きたとされる1760年代にまで遡れるといわれるが、人の手で作業できる適度な範囲の生産物の中で経済が回っていたことで、権力者や既得権者以外は、ほどほどの状態（貧しい人も沢山いたが）の人生を送っていたのだが、機械やシステムによる効率的な生産や蒸気機関の発明により移動能力が格段にパワーアップされやことで、資本家や、お金を集める能力のある者が飛躍的に富を得られることになっていった。

これにより、人々は等身大の暮らしから資本主義と呼ばれる世界に入ってしまったのだ。資本主義社会では続々と大量の商品やサービスが生み出され、どんどん世の中に出回ることになる。社会は大きく変革を遂げた。一般国民も労働機会や身分制度も解放される流れに乗って頑張れば、お金を得られる機会も増えていった。飛躍的に世の中が便利になっていったことで、人々も日々の生活に追われていた状況での質素で等身大の人生観から、個の幸せを多大に求める方向性に舵を切ったのである。その流れを刺激したのは、もちろんメディアや世の中の風潮である。

そして資本家が肥り続けるためには、とめどもなく社会に「相対的な幸せ」を得たいとする情報を送り続けなければ成り立たない。そして絶大な資本家は国家さえも牛耳っているとも言われている。例えば、アメリカのドルを擦っているのは、FRB（連邦準備制度）という民間企業であることを知っているだろうか？ また、日銀も45%の株は民間が所有している（政府の出資比率は55%）ことも多くの人は意識をしていないのが現状だ。だからといって陰謀論を鵜呑みする気もないが、アメリカ型の市場原理資本主義を続ける限り、経済は発展し続け、市場は拡大し続けないと成立しえないのである。

つまり、それが国家運営の骨子となっている以上、その意志がメディアに反映されたり社会的風潮となって、僕らを取り巻いてしまうのは仕方ないことである。一方で、北朝鮮やイランなどに行けば、こういった風潮は存在しないし、人々の思考もアメリカ型資本主義の影響はほとんど受けることはないだろう。

しかし、日本はアメリカのパートナー国家であり、経済的にも綿密に結びついてしまっていて久しい。この国に住む僕たちの思考形成は嫌が応でも戦後からのアメリカ型の市場原理資本主義の影響を受け、人生観や幸せ観もそれに沿った展開になってしまっていることを今一度理解したほうがいい。こうして戦後、多くの人が過剰に『相対的幸福』を求めるゾンビのようになっていったのだ。

骨抜きになってしまった日本人

「エコノミックアニマル」の成れの果て

「エコノミックアニマル」（経済動物＝仕事中毒）。以前、日本人は世界中からそう揶揄されていた。この言葉は、日本の経済進出が活発化していた1965年、パキスタンのプット首相が日本のことを言った言葉で、特に日本の経済拡大の影響を受けたアメリカからは激しいバッシングを浴びせられた。そして、この言葉は1969年には流行語にまでなった。

こうして日本の経済活況はバブル崩壊（1991年）まで続いたわけであるが、ある意味社会や人生のあり方は分かりやすかったと言ってもいいだろう。

いい大学を出て、いい会社に入り、順調に出世し、定年退職を無事迎え、退職金と年金をしっかりとらって、穏やかに老後を過ごす。というロジックが成立していたし、生活面においても、例えば車にしても、カローラ→マークII→いつかはクラウン。さらに成功した人はベンツという図式も実にシンプルであった。

日本が経済成長をしていた頃の生き方は、一部のドロップアウト組（別に悲観的な意味ではなく、自分の力で生きること志す者などの総称）を除いて、実にシンプルだった。この時代は、頑張れば会社も報いてくれるという信頼感の上に人生が担保されていたのだ。また、集団行動能力の高い日本人は、この社会構造との親和性も高かった。

バブル経済が始まったとされる1986年、僕は18歳だった。ある高級リゾートホテルでアルバイトをしていたのだが、毎日のようにフェラーリやベンツ、ジャガー、見たこともないようなクラシックカーがフロント

前の駐車場に停まっていた。こういった高級車を操ってくる人達は、見た目からお金の匂いが漂い、腕には金ピカで宝石が散りばめられている時計、そして指には輝く指輪が何本もはめられていた。男からしてこうであるわけだから、連れられて来る女性は、「お前は女優か宝塚か？」というような出で立ちに、高そうなバッグ、煌めく宝飾品で武装し、キツイ匂いの香水に包まれていた。こうした連中は僕にこう言ったものだ。

「一番高い、ワインを抜いてくれ」

力のない若造でしかない僕が、このような人々に毎晩給仕するうちに、「絶対こう（この連中のように）なってやる」。と思つたのも、ある意味仕方ない流れであろう。（笑）このように、人は見て触れた情報に、かなりの影響を受けるものなのだ。

しかし、我が世の春を謳歌し、ジャパン・アズ・ナンバーワンと社会学者エズラ・ヴォーゲルから讃えられた、日本の経済快進撃もいずれは終焉を迎えることになる。総量規制が主要因による、1991年のバブル経済の崩壊だ。

そこから日本は、「経済的進撃」「国家の成長に担保された人生設計」という道しるべを失ってしまった。日本は何度も政府・閣僚を変えながら、あの頃の夢を取り戻そうと様々な施策を講じたが、それが上手くいっていないことは失われた20年と呼ばれていることも明らかである。

同時に国民も、勤め人の場合は頑張っても評価や所得が上がっていない不安や、自らビジネスを行う者も右肩上がりではない時代でビジネスを行わざるを得ないもどかしさを感じ、潜在意識下では大きな苛立ち、不安、そして落胆を感じていった。

こういった中、通信革命・IT革命時代が到来する。この流れをチャンスとして速やかに捉えたのが若手起業家たちである。彼らはクレバーかつ柔軟

な頭脳と若者ならではの行動力で、瞬く間に社会に新しい産業を創造し、事業を拡大していった。今のプロ野球12球団の内3つがIT系企業（ソフトバンク・DeNa・楽天）であることを見ても、日本ですでに大きな一つの産業となった結果であろう。

しかし、事はそう簡単ではない。

IT系企業が勃興したからといって、日本国民の新しい道しるべになるような大きな包み込みが出来ていないからだ。国家にとつての道しるべとは、多くの国民の心を一つにし、一定の安心感の下、行き先を示していくものでなくてはならないからだ。

加えて、政府が躍起になって、この国を立て直そうとすればするほど、それが上手くいかないことは国民に露呈され続けてしまったため、「もう日本は以前ほどの希望に溢れた国ではない」「経済もどんどん新興国に抜かれてしまっている」「だからといって抜本的な対策もないので、何をやってもムダなんだろうな」という諦め感が国民の意識下に巣食ってしまったと思えてならない。

国民の多くが安倍総理に期待しているようであるが、いかななものだろう。

引きこもりゆく経済大国

「これは生き方としての成熟なのか？」

小さな暮らし、持たない暮らし

今から16年程前の29歳頃のときのことなのだが、あるベンチャー企業を訪問した、すこぶる業績が良く、僕もこの会社の何かを確か手伝っていたように思う。その経営陣に、とても思想的な人がいた。当時多分、今の僕と同じ四十代半ばあたりの方であつたように思う。

彼は、机の上で世界地図を見せてくれながら、僕にこう言った。

「石崎さん、日本が今まで、どうして経済発展したのか分りますか？」

「国民が丸となって頑張ったからですよ。」「手先が器用だったからですか？」と僕は言った。

「よく世界地図を見て下さいよ、何か気付きますか？」

「うーん、別に何も気付きませんけど・・・」

「戦争終結後、アジアで西側諸国になったのは、どの国ですか？」

「日本と韓国、タイくらいですか？」適当に僕は言った。

「じゃ、日本のある場所は？」さらに問いを發する彼。

「ここですよ。」僕は地図を指差した。

「よく見てください。この場所（日本がある位置）は西側諸国にとって戦略的に重要な場所だったんです。すぐ隣に中国や北朝鮮、上にはソビエトという共産国があるわけですから、世界が第二次世界大戦後、西と東に分かれていこうとする中、アジアの国々の多くを西側諸国にしておかないと今後大変なことなるわけです。だから、これらの国々の指針にするためにも、日本を経済的に栄えさせなければならなかったんですよ」彼は言った。

「日本自体が復興を頑張ったというのも事実ですが、アメリカを中心とする西側諸国が日本をあえて発展させてくれたんだという認識のほうが大切なんです」と、さらに説明を加えた。

そして、今の日本を予感させるかのごとく、彼はこう結んだ。

「しかし、もう東西冷戦は終わったので、日本を特別待遇はしてくれません。これからは、どんどんアジアの時代になって来るはずですよ。そうすると日本は、今までのビジネスモデルではもう発展しないんですよ」

果たして、この会話があった16年後の今、確かにそうになっていると思えてならない。

かつて、日本が輝いていた時代があった。しかし、今は、工業立国としても、どんどん存在感を失っていつていることは誰の目にも明らかであろう。

アメリカのように、GoogleやAmazonといった産業構造を変えるほどのベンチャー企業をどんどん生み出せる土壌もなく、また豪腕金融立国になって世界経済を席巻するほどの国民性でもないため、過去の成功体験の焼き直しを手を変え品を変えて行うことしかできないのではないか。否、「日本の黄金時代が再びやってくる」「日本は必ず復活する」といった論を展開している人達も一定数いるが、僕のような凡人から見ると、今まで蓄えた国富を有効に活かすことができず、残念ながら、それを食い潰しながら生きながらえているようにしか思えないのだ。

「では、お前なら何ができるのだ？」という声も聞こえなくないが、僕の考えは後述することにした。

話を戻すが、ある意味、戦後復興時代から、高度成長期、そしてバブル期までは、国民の多くは幸せであったと思う。とにかく「頑張れば」人生の道が開けたからだ。それは、勤め人も自営業者も経営者も広義で同様である。そして、「頑張る」ことは、日本人の最も得意なことでもあった。「頑張る」ことで稼いだお金で土地や家を買ひ、今では考えられない預金金利（1970年代～80年代、郵便局の10年定期預金金利8～12%）でお金を預け、土地や株も右肩上がりです昇っていった時代なのだ。この時代、一般人にはグローバル化という概念も不要で、日々頑張っていれば、日本国の勢いに乗って多くの人が報われていたのである。つまり、頑張ることこそが、『人生の道しるべ』であったのだ。

だが、今は昔の話だ。

失われた20年の間、政府が国を立て直そうと行った施策が有効的に機能していないことを無意識的に失望している国民は、ほとんど「己の生活防衛」に、意識をフォーカスして行っている。己、すなわち「個（人）」として一生サバイブしているためには、「お金（を稼ぐこと）」が何よりも必要であるという視点へのフォーカス、一方の流れとしては、お金を稼ぐことよりも、「使わないこと」「儉約すること」「シンプルライフ」「持たない暮らし」といった視点へのフォーカスだ。

事実、書店の棚を見ると、この二つの流れの本が多く目に付くはずである。それを踏まえて街の風景を眺めてみて欲しい。日本人は、どちらのほうにフォーカスをしている人が多いのか、何となく分るというものだ。

いずれにしても、「自分の人生」「自分の成功」に対し、これほど過度に意識を張り付けている時代はこれまでにはなかった。

ある話をしたいと思うが、数々のメジャー・ファクション情報誌の編集長を務めた著名な某氏が僕のセミナーで語ってくれた話であるが、日本人はそもそも質素な民族だという。

戦前・戦後すぐ生まれの人は、明日をも分らない暮らしの中で原体験（幼い頃の生活）を送って来ているために潜在的にお金を使わない、派手なことはしないという傾向がある。そしてバブル崩壊後に生まれた人達も、日本が勢い良く上昇していない時代に育って来ているために、これまた潜在的にお金をなるべく使わない人が多い。

お金を派手に使うのは、日本が上昇気流に乗り始めた、1950年代から、バブル景気を経験している1970年代前半頃までの、わずか20年くらいの間のゾーンに生まれた人達だけの極めて特殊な現象だと語っていた。僕は、1968年生まれだから、まさしくこのゾーンに入っている人種である。（笑）

このように、日本が奇跡の復興から上昇気流に乗っていた特別な20年間の影響を受けた人はごく一定の層であり、今を生きる日本人のほとんどは、『小さな暮らし、持たない暮らし』の影響を受けている人が主流なのだ。

しかし、戦前・戦後すぐに生まれた人は、冷めた気持ちや無気力感で、『小さな暮らし、持たない暮らし』に甘んじて来たわけではない。時代的に個人の幸せや成功を後押しできるような状況ではなかったのだ。この時代の人は、人としては骨太であったように思う。しぶとく厳しい時代を生き抜き、今の日本の土台を築いて来たのである。

反面、バブル経済崩壊以降に生まれた人達の、『小さな暮らし、持たない暮らし』は、ゆとり教育による心の強さの欠如や諦め観、無気力から来る価値観であるように感じる。

「どうせ、頑張ってもムダだし、しんどいし」「適当にほどほどの人生でも別にいいし」

現に海外への留学者数も、同じ東アジア圏の中国や韓国に比べると年々減少傾向にあり、経済協力開発機構（OECD）の2013年度の加盟国の教育に関する調査結果によると、大学などの高等教育機関に在籍する日本人のうち海外に留学している学生の割合は、わずか1・0%で、比較できる加盟国33カ国中で、**ワースト2位**だったそうだ。

天然資源も乏しく、工業技術もアジアの国々に猛迫される中で（特定の分野ではすでに追い越されてしまっている）若者達の内向き志向、等身大志向を直ちに改善させなければ、今後日本人は世界のビジネスシーンで太刀打ちできなくなってしまうのは必至だ。政府もようやく、そのことに気付いて、ゆとり教育を終息させたが、子供は親や人間を見て育つのが常である。こうした現状を変えるには、もっと大人がイキイキと生き切り、カッコいい背中を見せなければならぬ。

そのためには、この国に仕組まれた **“あること”** に日本の大人たちが同時多発的に気付き、その呪縛から抜け出さぬ限り、道はないと僕は確信している。様々なしがらみによって骨抜きにされているマスコミや政府に期待しても、その日が訪れることは決してないだろう。

また、自分や個としての幸せのみに意識をフォーカスしている、**「自己実現病社会」** から早く卒業しなければならない。また、蔓延している、あきらめムード、**「どうせ○○だし菌」** に感染しない若者の輩出も、国家的急務である。

第二章 神話を知らない日本人

世界を牛耳るユダヤ人、引きこもる日本人

†2000年前の古代語が読めるユダヤ人

世界で最もしぶとくて強靱な民族といえば、あなたはどの国や民族をイメージするだろうか？

「アメリカ人」「中国人」といった声も上がってきそうだが、僕は紛れもなく「ユダヤ人」だと思う。ご存知の方も多いと思うが、ユダヤ人は2000年前、祖国（今のパレスチナあたりに多くのイスラエル人が住んでいたとされる）を追われ、世界各地に散らばって生活することを余儀なくされていた。また民族の特異性（キリスト教を信じずユダヤ教を信じる。排他性、独自の風習、金貸し業や貿易業などによる金持ちが多かったことなど）からヨーロッパ各地で蔑視を受け、特にナチスドイツによるユダヤ人への徹底した迫害は誰もが知る所であろう。

しかし、第二次世界大戦後の1948年、ユダヤ人はイギリスの後押しもあり、パレスチナの地（当時イギリスが統治をしていた）に「イスラエル」という国家を建国し、長年の悲願を果たしたのだ。

当然、土地を奪われた周りのアラブ諸国との激しい軋轢が生じ、それは絶えることがない状況が今も続いている。これを起因とした、アラブ周辺国と幾度となく戦争（第一次～第四次に亘る中東戦争）や紛争による戦火を交えているが、ユダヤ人は全ての戦いに結果として負けたことはないのだ。さらに多くの人が知るように、世界の金融マーケットを牛耳っているのもほとんどがユダヤ人であり、アメリカの政財界、マスコミなどにも非常に強い影響力を持っているといわれている。世界最強国家のアメリカを動かすユダヤ人は世界を動かしていることと同義である。といわれる所以でもある。

一方、我が国はどうであろう。

戦前の日本人には、世界でも最も強靱な精神力、強い肉体、辛抱強さ、精神性、学習心などが整っていたといわれていたが、今の日本人には残念ながら、その一部しか継承されていないように思う。戦後、時代がより経済化、自由化されていった中で生き方変容である以前に、やはり、アメリカによる占領政策（3R・5D・3S政策とも呼ばれている）により、日本を精神的、軍事的に無力化させるために、自虐観の植え付け、伝統による道徳教育（教育勅語）の禁止、古事記等による日本建国神話を含まない歴史教育を徹底されるなど、日本人の意識基盤となるべき叡智を封印されてしまったのである。この状態を「魂の抜けた豚にされた」と表現する人もいるほどだ。

経済的には世界屈指のレベルにまで上り詰めたが、国としての強かさ（国家戦略）を伴わない、どこか「芯」の抜けた国となってしまう、目先のことや経済のことばかりに気を揉むような国民となってしまったのである。

このあたりで、明治期以降、日本人の基礎精神を培ってきた教育勅語をご覧いただきたい。

「孝 行」 Ⅱ 子は親に孝養を尽くそう

「友 愛」 Ⅱ 兄弟姉妹は互いに仲よくしよう

「夫婦の和」 Ⅱ 夫婦は敬愛の心をもって仲睦まじくしよう

「朋友の信」 Ⅱ 友人は誠の心をもって信じ合おう

「謙遜」 Ⅱ 他人に対しては礼儀を守り、自分に対しては慎み深くしよう

「博 愛」 Ⅱ 広くすべての人に愛の手を差し延べよう

「修学習業」 Ⅱ 勉学に励み、職業を習って身につけよう

「智能啓発」 Ⅱ 知識を広めて才能を伸ばそう

「徳器成就」 Ⅱ 自己の人格の完成に努めよう

「公益世務」 Ⅱ 公共の利益を増進し、世の中のためになる仕事をしよう

「遵 法」 Ⅱ 法律や秩序を守ろう

「義 勇」 Ⅱ 正しい勇気を持って世のため国のために尽くそう

お読みいただいてもお解りのとおり、何か特別なことが書かれているわけではなく、人の道として個人的なことから社会的な公的視点に基づいた道徳観が書かれているだけである。しかし、なぜGHQは、「教育勅語」を封印したかったのかを考察したい。

これは人（の心）をハードとして捉え、教育や慣習をソフトとして捉えると分りやすい。人にはもともと持って生まれた性格や特性があるが、オギヤーと生まれてから人生を過ごす思考基盤となるのは、やはり、その国で受けた教育（親や学校などによる）と、その国の慣習による所が大きい。

世界にはツバを平気で道路に吐くことが平気な国民もいるし自分が悪くとも謝らない民族もいる。その国で生まれたことにより、その国の慣習を無意識に

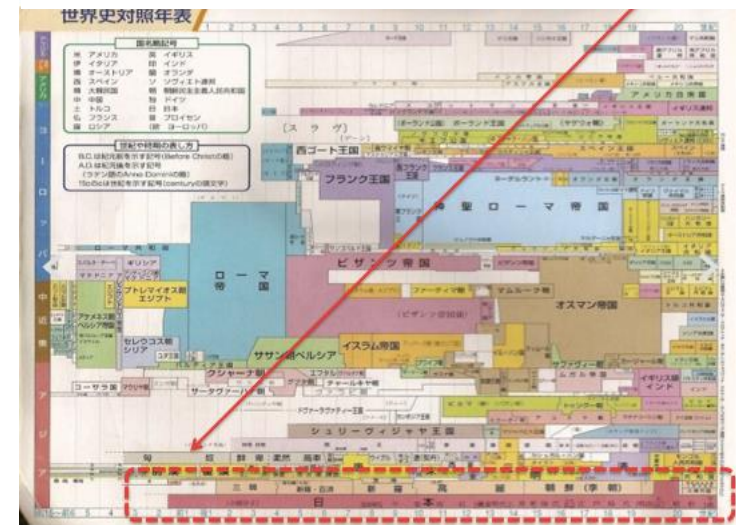
身に付けてしまうからだ。また教育にしても然りである。心がニュートラルで素直な幼少期・少年期に学んだ（教育された）ことは、根強い意識基盤となっていくのだ。

このように意識教育とは国家の根底を担う重要なものである。故に、目先の「私」のことよりも「公」の意識視点を育む土壌となる教育勅語を野放しにしてしまうと、精神的に強靱な日本人を生み出してしまう温床になる判断したことが窺い知れる。

また、日本は世界最長の国家（正史である日本書紀によると建国は約二千七百年前の紀元前六六〇）であり、天皇家は世界最古の王朝（※あえて王朝とした・125代継続）であるといった、古事記などによる神話の時代からの歴史教育も、日本人に高い誇りを持たせてしまう懸念があるために、戦後一切教育することを封印されてしまっているのである。このように左図（年表）で見ると、意識的に誇りを持つてしまうのが国民の心情であろう。

日本は世界最長の王朝国家（約 2700 年継続）

- ・ 日本は縄文時代は約 1 万 6000 年前から
- ・ 世界最古の土器も日本から出土という事実（1 万 6000 年前）
- ・ エジプトも黄河文明などの 4 大文明でさえ、5000 年前から



一方で、日本にこのような教育的封印を行ったアメリカをはじめ
欧米の国々の教育では、ギリシャ神話や旧約聖書などをしっかりと
学び、国民は当然「聖書」の内容を理解しているのだ。

あなたはこの現実を知ってどう思うだろうか？

さて、ここで興味深い話をしておきたいと思う。

「ユダヤ人は強い」という話を僕は展開してきたのだが、その最もたる基
盤が教育によるものだと思う。イスラエルの人々は子供たちであっても
2000年前の文章を読めるそうだ。神話から建国に至る歴史まで、し
っかりと原文で読むことができるようだ。

一方、我々日本人の中に日本人のルーツを知るための「古事記」や「日本
書記」を原文で読める人がどれほどいるというのだろうか？ 原文でなくても、
これらの書物に触れたことのない人のほうが圧倒的に多いだろう。日本人が

再び、あらゆる面で誇り高く強い民族になるには経済力だけではなく、正しい教育によって意識基盤を整え直さなければならいと確信する。ただし僕は、軍国主義や右傾の思想はもっていないので誤解なく願いたい。

20世紀を代表するイギリスの歴史学者“アーノルド・J・トウインビー”は、こう述べていることを合わせてお伝えしたい。

「12、13歳までに神話を学ばなかった民族は例外なく滅ぶ」

果たして、日本はこのまま衰退し、滅んでしまうのか？ それとも覚醒し、復活するのだろうか？

あなたは人生の道しるべを持っているか

↑お金を稼げば人生の成功者か？

日本人の戦前までの人生の「道しるべ」は高い次元に「公」の道德観を基盤にした生き様であつように思う。もちろん、どんな時代も問題のある人は一定数存在してはいたが、「公」の視点や「誇り」、「人としての恥の概念」をととても大切にしていた国民であつた。真面目で勤勉、嘘をつかず、人を裏切らず、足るを知り肅々と自分のやるべきことをやる。これが、前時代の日本人の姿である。ハワイや南米に移民をしても、過酷な地を最後まで開墾し切り、着実な成果を出せたのも前時代の日本人ならではのあろう。

余談であるが、箱根の富士屋ホテル（1878年・明治11年創業）に飾られている戦前の日本人のお偉いさん方の写真を初めて見たとき、今の日本人では決して醸し出せない凜とした誇り高いオーラに見入ったものである。

一方、現代の日本人に、何か「道しるべ」となるものがあるのだろうか？
だが、それはある。

「お金だ」

戦後の復興期から今に至るまで、日本人の「道しるべ」となったのは、間違いなくお金である。戦後から高度成長期にかけては、今よりも豊かな暮らしを求めて必死に働いて、お金を稼ぎ、様々な便利な利器を次々と手に入れることに向って日本人は一心不乱に邁進していった。この時代は、「とにかく勤勉に働ければ報われる」といった国民の共通意識があつた。ある意味、意識的に安定していた時代であつた。

しかし、その後訪れたバブル期では、勤勉に働くことよりも株や土地を買

って転がすほうが勤勉に働くよりもよほど儲かるという現象が日本列島を包み込んでいった。最初の頃は「人生はお金ではない」と横目で見ていた人たちも、「乗り遅れては損」とばかりに、その上昇益に預かろうと多くの人が踊った。このあたりからだろう、日本人の心がお金になびいていったのは。

こうして、お金に対する意識が大きく変容した後、90年代に入り、バブル経済は崩壊。日本の経済発展神話も崩れ去った。その後、デフレ経済化した後の人々は自己保身のために、お金を俟約するようになり貯蓄に励んでいくようになる。

だがしかし、陰りゆく時代の中、2000年前後に起こった通信・IT革命の登場により、普通の人々が投資やネットビジネスなどで億万長者になれる時代が突如やって来たのだ。このチャンスに才覚と敏捷性、展開力に優れた若者起業家たちは飛びついた。また、インターネットでの株取引やFX（外国為替取引）といった投機行為も盛んになって行き、ニートや主婦が数億円以上のお金を稼ぐようなことも起きて来た。こうして短期間の間に、「ジャパニーズ・ドリーム」を掴み取っていく人たちが現れ出てきたのだ。一方で、その対局としてロハス、スローライフ、草食系、持たない暮らしなど、行き過ぎたマネー経済から意識を外す者の潮流も生まれていったように思う。

かなりざっくりではあるが、戦後から今に至る日本人のお金との関わりの流れを考察してきたのだが、認識して欲しいのはこういったお金への関わり方の流れではなく、現在、大多数を占める日本人の意識の流れである。

**「これからの日本は昔のような景気は戻って来ない」
「だから無理をせず、ほどほどに暮らせればいい」**

というような、ある種の諦めというか達観の思考になっているように思えるのだ。これでは日本という国のエネルギーはどんどん低下してしまうであろう。

国土から世界が欲する豊富な資源が湧き出ることのない日本のような国は、製造業、金融、知財、医療技術、観光などを世界トップレベルに盛り立て維持発展させていかなければ先細りする一途である。その上、日本国民は精神性を骨抜きにされたまま、長い間の経済成長及び、経済至上主義の中にどっぷりと浸かってしまった。

投資やビジネスを積極的に展開し、がつつりと稼ごうとする人は、「お金を沢山持てば人生ハッピー」という価値観、モノの所有や消費から距離を置く人は、「お金さえ使わなければ人生何とかなる」といった価値観に概ね振れていると思われるが、経済的に「攻める」「攻めない」にせよ、その価値判断は、「お金」を基準に行われているのは間違いないであろう。

僕も過去経験したことだが、（著書『エメラルド・オーシャンな働き方』※フオレスト出版に詳しい）「お金を稼げば人生も豊かになる」と思って猪突猛進した者に起こる特徴的な精神的な現象であるが、どれだけお金を手にしても、心の乾きを潤すことはできないのだ。

なぜならば、**お金をどれだけ追い求めても、それだけでは人が価値ある人生を生きるための道しるべにはならないからだ。**

お金はモノやサービスに転換できる便利な手段ではあるが、さらに手にしたいという魔的な要素も内包している。お金に対して必要な本当のインテリジェンスは、稼ぐことよりも、上手く付き合うコントロール能力のほうである。

「お前に言われたくない！」と思う方もお見えだろうが、せめて僕程度の経験を済ませてから反論して欲しいと思う。お金を道しるべにしている限り、あなたの本当の成功はできないと僕は確信している。高級住宅に住み、フェラーリを乗り回し、素敵な異性をはべらせたとしても、その快樂の効用は一瞬である。欲の魔は、次の快樂をけしかけてくるのだから。

その先の扉を開けて、“本当の成功と呼べるための何かを”つかまなければならないのだ。

自信をなくした日本と自己啓発社会の到来

↑自分でなんとかしなければ時代のはじまり

1990年頃だったように思うが、当時僕が務めていた某情報出版企業で、「自己啓発セミナー」に参加するということが流行り出した。どこからかのご縁で、このようなセミナーに参加した一ツ歳上の先輩社員のAさんがセミナー終了後、突然別人のようになってしまった。それに影響を受けた同年生まれのBさんもAさんの紹介で同じセミナーに参加し、Bさんは以前とは人格が変わっていった。彼らはどうも勧誘プログラムにも参加していたようで、同じフロアで働いていた僕に対し、しきりにAさん、Bさんからこう言われたのだ。

「お前は絶対、あのセミナーに行くべきだ」

Aさん、Bさんのあまりにもの変わり様に興味が湧かなかったわけでは無いが、そのセミナーの受講費は12万円くらいしていたため僕はこう言った。

「高過ぎるから無理ですわ。それに自己啓発の本はいくらでも書店に売っているじゃないですか」

すると、ここまで言われたのだ。

「石崎君、分っていないね。あのセミナーで体験するのは、生きる上での叡智そのものだ。体験しなければ絶対に分らないし、人生での大損失だよ」

AさんとBさんは、そのような言葉を僕に吐き捨てニヤニヤ笑っていた。

彼らのまるで躁状態にも見える姿を見るたびに、そのセミナーは普通に生活しては起こりえない意識変容を起こす「秘密クラブ」のように思えてならなかった。「怪しいけれど気になる」そんな気持ちになってはいたのだ。

ある日、僕が尊敬をし、憧れていた先輩のCさんまでもが僕にこう言ったのだ。

「石崎、俺も今度の週末にあのセミナーに出ることにしたよ」

僕は正直驚いた。Cさんは一流大学出で、常にポジティブでありながらも冷静。そして論理的思考のできる人だったからだ。しかもハンサムで人柄もソフトで女子社員からも人気の人であったため、僕も憧れていたのだ。

このフロアには20人ほどが働いていたが、当時の僕の仕事は、彼らとの距離が特に近く、Cさんまでもがこのセミナーに出るということで、まだ若かった僕は疎外感に苛まれていったのだ。でも、わずか三日間のセミナーに12万円というお金を簡単に支払えるほど僕は成熟もしていなかったし、そんなお金があるならば遊んだり服を買ったりしたい年齢だった。

「何がセミナーだ、俺は俺の生き方があるさ」

そう自分に言い聞かせて気のないふりを続けたが、週明けCさんがセミナーに出て戻って来て、開口一番こう言った。

「石崎、あれは出るべきだぞ、モラルが上がったし、意識が今までとは全く変わったよ」

つかさず、AさんとBさんが僕に近寄り、こう言った。

「お金が厳しいなら俺たちが出してあげるから、お前も行きなよ」

ここまで言われたのなら僕も肚（はら）が来まった。僕は、AさんとBさ

んに連れられてセミナーの事前体験会に連れて行かれた。そして、その場で申込用紙にサインをしたのだ。このセミナーは、ベーシック、アドバンス、そして最後は勧誘プログラムを含めたセミナーになっていたのだが、（確か記憶では）そのベーシックセミナーにまずは申込んでみたのだ。

結論からいうが、このセミナーはとても勉強になったため次のアドバンスにも申し込みたいという気になってしまった。しかし、アドバンスセミナーは35万円くらいしたため、薄給の若造の僕には、そんなお金を持ち合わせではないかったため、アドバンスには出ないことを告げると、

「あなたのような人が次のステップに行かなくてどうするの！」

周りの人たちから強い説得を受けたのだ。しかし、僕も頑固なところがあるので首を縦には降らなかった。

「もう十分勉強になりましたから、ここまででいいです」

僕は、そうきっぱりと言い切った。

すると、今度は指導員と呼ばれる人が僕のところにやって来て、次のフェーズがいかに大切か、いかに為になる内容かということをとくとく語り、最後にこう言われたのだ。

「石崎君、ミラクルを起こせ！ 君ならば起こせるよ」と。

それを聞いていたセミナー参加者から次々と拍手が沸き起き、一種異常な雰囲気覆われたのだ。その刹那、このような合唱が沸き起った。

「イシーザキイー、ミラクルー♪」「イシーザキイー、ミラクルー♪」

こうなるともういけない。後に引けるような雰囲気ではないのだ。

「じゃ、やりますよ次も！」

僕は叫んでいた。

割れんばかりの拍手が巻き起こったのはいいが、35万円というお金を僕は持っていない。一体どうすれば・・・？

指導員に話すと、お金というものは「何としても工面する」と本気で決断すれば何とかなるものだ。動いて動きまくって工面することが自信と自己変革につながると熱く説かれたのだ。こうなると元来負けずぎらいの僕も本気になった。つまりは、誰かから借りて来いということである。

僕は親にだけは頭を下げたくなかったので、ある友人に相談をした。すると彼は少し困った顔をしたが、「お前がそれだけ本気ならば貸すよ」と言ってくれたのだ。かくして僕は、次のアドバンスというセミナーに参加できることになったのだ。この間、使ったお金は約50万円。20代前半の若造にとっては大金であった。

その後の僕であるが、このセミナーはアドバンスまで出て次のフェーズには参加しなかった。理由は勧誘プログラムがついていたからだ。僕は自分が成り上がりたいたいと思っていたから、この手のものにお金を払っても学ぼうと思えるが、普通の人には強く勧誘して、50万円もお金を出させることはしにくかったからだ。また、紙面の関係上、セミナーでの体験を書くことはできないが、1980年代から90年代にかけて、このようなセミナーが日本各地で行われていった。ただ、この時代のセミナーは、今頻繁に行われているような、「自己啓発」や「引き寄せ」といった「個」がいかに幸せになるか、豊かになるかといったことへのフォーカスよりも、自分を高め、社会に影響力を及ぼすためのアイデンティティの再構築、すなわち「自己開発」にフォーカスされたものであったように思う。

いずれにしても日本経済が失速し、日本人が信じて疑わなかった「頑張れば報われる」といったロジックの崩壊した1990年代に、これからは「自力で何かをつかんでいかなければ」という意識的風潮が高まり、こうした自己啓発セミナーが数多く勃興した時期とが重なるのが興味深い。

なんとしても生き残りたい

↑残酷な時代だからこそ流行るセミナー詣で

僕の会社ではエステサロンやメンズ・エステサロンも経営しているのだが、あるとき打ち合せに訪れたカード決済会社の営業担当に、「今、どんな業種のカード決済の売上が高いのですか？」と聞くと、「セミナーをやっているところですかねえ」という答えが返ってきた。この会話をしたのは2012年頃のように思ったように思うのだが、周りの人たちから、「○○セミナーに出て来たよ」といったことを耳にする機会も増えていたので、「なるほどね」と素直に納得した。

セミナーを通じて「何かを学びたい」という人々の意識の流れが活発化した結果が、過去稀に見る『自己啓発社会の到来』である。

セミナーの内容は実に多岐に亘るが、今の時代、特に活発化しているものとしては、特別なビジネススキルや稼ぐ方法を身につける「ビジネス系」、心を解放し、自分らしく生きるための「メンタル系」、見えない世界とつながることで特別なパワーや叡智を学ぶ「スピリチュアル系」、自分自身を高め、やりたいことがやれるようになるための知識や手法を手にするための「自己啓発系」など、実に様々なものに人々は関心を向けては足繁く学びに向う。

しかし、これらのセミナーに対し、意識が向かっている根底の動機は全て共通しているように思う。様々なセミナーに出ては学び、（それを意識しようがしまいが）その知恵を武器にその他大勢の人よりも抜きん出ることによって、『自分だけはこの残酷な時代を生き残りたい』のである。

この説には異論もあるかも知れないが、日本国全体が上昇気流にあり、真

面目に働けば報われる時代には、これほどスキルアップや自己啓発、心理学や癒しといったテーマのセミナーは盛んでなかった。しかし時代は移ろい、もはや国や会社だけに自分を委ねることはできない。だからこそ「自分の人生は自分でプロテクトしていくしかない」。当たり前といえば当たり前前の意識的潮流であろう。そして、こういったスキルアップの流れに違和感を覚える人たちは、この時代の乾いた心を癒そうと心理学やスピリチュアルといった分野に興味を示している。

**誰もが今日よりも明日は素晴らしい自分が欲しいのだ。
「自己実現」を手に入れたいのだ。**

先ほど、僕が自己啓発セミナーに参加をした経緯を書かせていただいたが、僕もそういった武器が欲しかったのだと思う。そして今では、自分がこのようなセミナー講師を時折やっているのだから人生は面白い。

自分の幸せだけを追及するという病い

↑自分の未来にしかフォーカスできない人たち

1980年代、90年代に自己啓発セミナーは萌芽し、2000年代には、様々な完全な市民権を得て定着をした。(僕がここで言う、「自己啓発セミナー」とは、人が気づかずにいるところを教え示して、より高い認識・理解に導くこと。という意味においてのことで、心理学やスピリチュアルの学びも含めたセミナー全般を指している)しかし、僕はこのような流れに対して、随分以前からある種の違和感を覚えていたのだ。これは異業種交流会のようなものを含めてもそうであった。しばらくの間、その違和感が何から来るものなのか分らなかったのだが、一つの答えをつかんだのだ。

『未来を今よりも良くしたい人々の群れ』

なぜ、それが違和感につながるのか？その答えのキッカケとなったのは、日本の古き叡智を持つ意識的指導者の方々との出逢いからによる。その気付きとは、こういった場に集う人の群れの多くは、「自分の幸せ」「自分の成功」「自分の金儲け」といったことばかりにフォーカスしている人たちだったからだ。

特にアメリカを主流とする欧米系の「自己啓発系セミナー」や「自分の望む姿、望む状態を手に入れるためのセミナー」「成功法則」といったものが取り扱う学びは、「自分」という視点での「幸せ追及」「成功追及」ばかりである。すなわち「個」への偏ったフォーカスに重きを置くものだ。本当にこのような学びに比重を置くことが、日本人にとってベストなのだろうか？

本当の人生の成功を生み出すだろうか？

僕は、（今は）そうは思わない。

なに！「個」がまずは幸せになって成功しなくては意味がないだろう。お前、何キレイごとやってんの？どうやって飯を食っていくんだ！

そう思われる人がほとんどだろう。その感覚は僕にも痛いほど分る。僕も20代から30代半ばまでは、「個」の幸せや成功をつかむことばかりに執心していた。そのブースターになったのは欧米系の自己啓発や成功法則だ。僕はこの手の学びをとことんやって来た。

来る日も来る日も、「月収100万円になるぞ」（僕が20代の頃は、とにかく月収100万円、年収1000万円といった数字が目指すべき指標になっていたのだ）「イタリア車のマセラッティを乗り回すぞ」「腕にはローレックスをはめるぞ」「銀座のクラブで飲めるようになるぞ」。そんなことばかりをしつくくビジュアライズし、口に出してアフアーメーションしていた。

今思うと、今この時間そのものを感じたり噛みしめることよりも、とにかく「自分の未来がどうなっているのか」「未来はこうなっているはずだ」ということにしか関心がなかったように思う。視点は遠くを見つめ、心ここにあらず。そんな状態だったと、当時の僕を知る人にも言われた。あなたの周りにもいないだろうか、いつもせわしなく動き回っている人や、様々な情報に翻弄されてキョロキョロしている人、未来の自分のことばかり語る人が。

こうした人の多くが、今という時間よりも未来のことに心がとらわれている。特にビジネス系の住民にこの傾向は顕著だ。ビジネスを通じて自分の未来を創っていくことを行いやすいために、それを加速させるべく、欧米系の「自己啓発」や「成功法則」「引寄せの方法」などをかなりの確率で学んでいるのだ。

今、この瞬間を生きている人と未来ばかりを偏重している人とは、どち

らが本当に人として豊かであろう？ 未来を夢見ることは大切だが、ある程度人生が軌道に乗ったら、未来ばかりに意識をするクセを手放すことをオススメしたい。

人は今、この瞬間を生きているからである。

余談であるが、僕が今を心から楽しめず、未来ばかりを意識していた時期は、なぜか女性にほとんどモテなかったことも付け加えておこう。未来ばかりに心がとらわれている男に、何か殺伐としたものを感じたのであろう。(笑)

スピリチュアルな人へ、ひと言

†自分以外に救いを求めても何も変わらない

「天使」「〇〇星人」「ハイヤーセルフ」「インナーチャイルド」「守護霊」などにつながり、そのエネルギーと一体化し、自分を癒したり、人生を最適化する、つまり、スピリチュアルに対し、非常に興味を持つ人が増えている。そして、それらの書籍やセミナーなども頻繁に存在している。

これらの多くには、「つながりましょう」「エネルギーを感じましょう」といったワードが頻繁に登場する。つながる。エネルギーを感じるという言葉は、耳心地はいいが、あたかも自分以外の何かの力が存在し、それを利用・活用するという点で、すでに、自分（主体）と、それらの力（客体）が分離していることが前提となっている。

また、これらを学ぶ人達がよく口にする言葉で、「気づきました」という言葉がある。「気づく」とはそもそも自己の分離が前提にあり、古神道、言霊での鎮魂とは逆の働きを意味するものである。気づいたらすぐに鎮魂に戻り、現実を創造すべきであるにも関わらず、気づきⅡ主体と客体の分離の状態であるために、そこに天使やハイヤーセルフが入り込み、つながりましょう。エネルギーを感じましょう。という概念が成立してしまう。

翻り、**古神道、言霊においては、自分自身が創造意思であり、「力Ⅲ」である。**という前提で、物事を現実創造していくため、そこに、つながりましょう。エネルギーを感じましょう。という他の何かは存在しえない。だからゆえ、物事は迅速かつ適時に実現してしまう。

スピリチュアルの学ぶのであれば、主体（自分）と客体（叡智）が分離し

ていないものを選ばなければ、あなたの現実創造は、とても不効率なものとなる。真実は、自分そのものの以外に救いを求めも何も変わらないのである。

第三章

欧米系の成功法則では

日本人は幸せにはなれない

「個」と「二項対立」からくる欧米系の思考観

↑意識の下部階層からの成功概念の歪み

今、日本で蔓延している、「自己啓発」や「成功法則」「引寄せの方法」といった類いの書籍やメソッドのほとんどは欧米からやって来たものだ。学ぶことでポジティブな意識になり、目標を設定し、アグレッシブにそれを達成する能力が身に付くとあって、組織や個人もこのような教えを有り難く学んでいる。

僕も欧米系の成功法則で人生が変わった人間の一々であるから、その効用は理解できているつもりである。（ちなみに、この手の勉強には裕に1000万円ほどは費やしている）

僕は20代の前半から憑かれたように欧米系の成功法則に乗っ取って成功願望を発動し続けた結果、27歳の時に人に雇われなくてもいい状態になり、28歳のときには念願の月収100万円を超え、30歳のときには月に300万円、500万円といった収入を手にする機会も増えていった。（ネット集客などの飛び道具がなかった時代である）そして、33歳ごろからは収入が億を超え、その資金を事業投資や資金運用などにどんどん投入し続けることで、僕の収入は凡人ではあり得ないレベルにまで上りつめていった。

こうなると我が世の春である。イタリアのオープンカーを乗り回し、東京のウオーターフロントのマンションに高級なモダンインテリアを設置し、夜

な夜な銀座や六本木に繰り出す生活がはじまった。かといって快樂だけに溺れていたわけではなく、ビジネスへのチャレンジもしっかりと行っていたのだ。

しかし、僕の心は一時満たされるだけで、その後は乾いていく。その理由が分らないまま、次の言葉を思い出しては、また行動をしていた。

決めた目標を達成できたら、さらに次の目標を定め、そこに向って直進前進することだ。さらに、さらに、さらに上を・・・。

こうして僕は、自分の器を超えて行く着くころまで行き着いていった。何かこの人生で成し遂げたいという各固たる目標に向ってではなく、「さらに稼ぎたい」「凄いいわれたい」といった自分の欲が、こういった成功法則によって強化され、目的化されていったのである。

欧米系の成功法則を学び参考にし、ベースにして成功した人の中には、「それは、あなたの活用の仕方が悪かったただけだろう」と思われる方もいるだろう。

であるが、目標を設定し続けること、それを達成し続けること、今日よりも明日はさらに成功していること、といった「未来にフォーカス」する傾向が、欧米系の成功法則には意識を向けさせるとは否めないはずである。

なぜ、それほどまでに未来、未来、さらに、さらに上なのか？

「自己啓発」や「成功法則」「引寄せの方法」といったものの多くは、興味深いことにアメリカで誕生している。アメリカといえば、真っ先に思い浮かぶのが、「自由の国」「フロンティアの国」である。アメリカの建国の歴史は、1620年9月、イギリスの南西にあるプリマスという街から信仰の自由を求めた清教徒（ピューリタン）の一団がメイフラワー号で大西洋を渡り、アメ

リカ本土に入植したことが始まりだといわれている。彼らは未来を夢見て、アメリカにやって来たのだ。そこで過酷な開墾や町づくり、先住民インディアンとの紛争、イギリス本国からの圧迫などに向き合いながら、自らの「自由」と「夢」を手に入れていったのだ。

こういった状況下で、今その瞬間よりも、「未来」に向けて、意識と行動集中させていくことを強いられ、また、それをブースターとしていったのである。こうしてアメリカ式の成功思考が育まれることになったのだろう。

また西洋の価値観は「個」が主体であり、その精神的基盤であるキリスト教は一神教であり、二項対立の概念が強い宗教である。今の日本人はかつての日本人の精神性から大きく変貌してしまい、「自分（だけ）」は幸せになりたい」「自分（だけ）」は良くなりたい」といった「個」の視点の目が大きく強化され、自分と他人、自分は正しい、他人は間違っている、ビジネスや投資は自己責任だから相手がどうなるうとも知ったことではない。といった二項対立思考がうごめくようになったのも、戦後欧米（特にアメリカ）の思考的影響を受けたことが大きいのではなからうか。

※ 二項対立の概念Ⅱ二つの概念が矛盾または対立の関係にあり、存在するものすべてを二分してしまおうという概念こと。例…キリスト教とそれ以外の宗教、男と女、西洋と非西洋、善と悪など。

果たして、こういった思考や概念で、日本人は本当に幸せになれるのであろうか？ 人生の成功を味わえるのであろうか？

後ほどお伝えするが、「個」や「自分の未来を良くしたい」といった意識の発動源は人の意識レベルにおける下層部分からの発動なのだ。これから本当の人生の成功や幸せを手に入れていきたいならば意識の発動層の理解と活用が必要である。

日本人は今すぐ欧米系の成功法則を捨てなさい

↑心の幼いリーダーを生む欧米系の成功法則

ところで僕は、今年（2014年）で起業をしてから19年目に入る。この間、実に様々なビジネスでの経験をさせられてきたわけだが、とても残念なことがある。

それは、尊敬できる成功者とはほとんど出逢えなかったことである。

すごい年収や年商を手に行っている人、全国に支店や店舗を展開したり海外にまで進出している人、株式公開を成し遂げ、莫大な資産を手にした人を筆頭に、様々な成功者やビジネスパーソンと知り合いことができたが、なぜか心が幼く、成熟している人が少なかったように思う。

僕の前で平気でスタッフに罵声を浴びせる人、お金の使い方が汚い人、オイシイ金儲けの話ばかりをする人、自由な立場で稼げることばかりに腐心している人、そして社会貢献だ、なんだと言っているわりには、その対象となるお客様のことをリスト的に扱ったり、ターゲットとしてしか見ていないような人たちも多かった。

そして、人としての美学がない人が多いことに驚くとともに非常に違和感を感じたものだ。中でも一番失望したのが、自分の利益のことしか考えない人、飛ばしという行為を平気でする人だ。

例えば、僕がAさんにBさんという人を紹介したとする。Aさんからは、「Bさんとビジネスが上手くいけば謝礼を支払いますので、誰かこのようなことに（ビジネスや投資など）興味を持っている人がいたら紹介して欲しい」と事前に頼まれての紹介だとしよう。

しかし、その後の経過報告を一切してこない人が少なからずいるのだ。さらに辟易とするのは、その後AさんがBさんと仕事をしていたり、AさんからBさんに対して何らかのアプローチを仕掛け、AさんがBさんから収益を得ているようなケースが多々発覚したりするのだ。Aさんは自分で「筋を通す」と言っておきながら実際に自分に利益が入ると、利益を自分だけが独り占めしたいと思うようになるのだろう。

「紹介者」ごときに謝礼を支払いたなくなるのだ。もちろん、「報告」しないことに対しても罪悪感もない。

つまり、「個」の視点だけからのビジネス観であり、「自分」と「他人（紹介者）」という二項対立思考からくるものだ。ビジネスの世界では、案外こういう行為をする人は多く、ビジネスとは戦争である。相手をどんな目に遭わせても自分だけが稼げればいい、儲かればいい。というメンタルの持ち主がはびこる世界なのだ。

一方で、必ず律儀に経過報告を欠かさず、「あなたのお陰でビジネスが成立したのだから謝礼を受け取って欲しい、ご馳走をしたい」。そう言って感謝してくれる人も少なからずいる。謝礼や報酬のことはさておいても、こういう人には誰かをまた紹介したくなる。

前者は、一時的に自分の目先の利益を手にしたようであっても、「美学の無い人」「口先だけの人」として、心から信頼されたり好きにはなっていないだけだ。

「自分だけ」「今だけ」「お金だけ」の価値観に支配されているような人を、僕は成功者だとは思わない。単なる餓鬼（貪ることしかできない亡者）である。

こういった餓鬼は、会社組織や一般社会にも一定数存在するが、日本社会に餓鬼を増殖させた一因には、過去数多くの国々を都合のいいように植民地化し、現在であればヘッジファンドのように、とにかく貪り尽くすことをし

てでも、儲けよう、ハッピーになろう。といった欧米系の思考や概念が深く関わっているように思う。ここに美学というものは存在しない。食うか、食われるかの「個」と「二項対立」の視点からの行き過ぎた資本主義があるだけである。

たかが人生80年ほどの終わりある旅である。人として生まれたのならば美学をもつて生きたいものだ。「欲望を限る」「足るを知る」「仁義礼徳」といった、戦前までの日本の素晴らしい価値観に今一度立ち返り、欧米に感化され過ぎてしまった「個」や「二項対立」の意識を手放し、意識的な成熟をした大人になって欲しいと願ってやまない。特に政界やビジネス界の住民は現代社会では多大な影響を持つポジションにいるのだ。この層が、「個」や「二項対立」の意識を手放すことができれば、この国は大きく変わることができるだろう。

アメリカ人と日本人

† 自分の地図だけを信じて押し付けるギャング

成功法則や自己啓発の本場はまぎれもなくアメリカである。その元祖と呼べる一人に、デイル・カーネギー（1888年～1955年）がいる。彼の成功の教えを示した著書に、有名な『人を動かす』（創元社）という本があり、多くの人に影響を与えているが、その本のタイトルは、「人を動かす」と日本語ではされているが、原文のタイトルは「How to win and influence people」となっている。直訳すると、「人に打ち勝って（打ち負かして）、人々に影響を与える方法」と訳することができる。いかにもアメリカ人らしい思考ではないか。

少々国力が落ちているとはいえ、アメリカが今の世界の覇権国であることには間違いはなく、アメリカのスタンダードが世界に押し付けられ標準化されている。その根底思想は、「自分は正しい、他は間違っている」といった正義思想であり征服思想である。つまり、二項対立思考そのままであるが、この思考は、日本の多くのビジネスマンや事業家に染み込んでしまっている。さらには、モンスターペアレントなどの問題も含めて一般人にもこの害毒は及んでおり、今の日本社会はどこか刺々しくなっている。

僕もビジネスの世界に生きてきたわけであるが、昔はよく他人と揉めた経験がある。「言った、言わない」と互いが譲らなかったり、前項で書いた飛ばしに対して激しくクレームをつけたことで紛争になったり、約束を平気で反故にして来る人や、いい時だけ擦り寄って来て利用し、ある時点から光が見えたと知らぬ顔で砂をかけられたことも一度や二度でない。

こうした経験を幾度となくすると、「食うか」「食われるか」「利用するか」「利用されるか」「ナメられてたまるか」「やられたら、やり返す」といった概念が嫌が応でも身に付いてしまうし、そうでないと搾取をされるだ

けで、自分は生き残ることができないという気持ちにもなっていく。

世の中の一定数の事業家やビジネスマンの目つきが鋭く、険しい顔をしているのは、こういった世界で切った張ったをやって来ているからである。このような理不尽な世界で生きていると、スピリチュアル的というとコーザルボデイが鍛えられるため、激しい独自のオーラが出てくるともいわれている。

僕も激しく動き回りビジネスを仕掛けまくっていた頃には、こうしたオーラをまとい、理不尽な連中と何度も遭遇する中で、時には徹底的に相手を攻撃したが、こうして揉めた相手とは根本的に分かち合うことはなかった。つまり虚しい結末を迎えただけであり、互いに負の感情を残したまま交流が途絶えてしまった経験は何度かした。これが学生時代なら毎日顔を会わせる中で、互いに感情をクリアして、より良い関係に修正することもできることもあるが、社会に出たらそのまま絶縁状態で終わることのほうが多い。学生時代とは異なり、ビジネスの関係では、お金がからむことが多いために、お互いの自分論への執着から壊滅的な状態になるケースが実に多い。折角ご縁があつて知り合ったにも関わらず残念な限りである。

こういった体験を30代半ばに集中して味わったのだが、なぜ、人と人はず時に、このようなことになってしまうのか？と考えていたときに、心理カウンセラーとして大活躍中の心屋仁之助さんのセミナーに参加したことでストンと腑に落ちたのだ。

「人は自分の地図だけを見て、人の地図を見ようとしない」

この言葉は、聞けば当たり前の言葉であるが、ほとんど意識をしていないことであつたために、目から鱗であつた。

「自分が自分が・・・」「自分こそは正しい」「資本主義社会だから弱肉強食は当たり前」「より自分が有利なところに移るのは当然であり、相手との今までの関係性なんてどうでもいい」「ただの口頭で

「の約束なんて守る必要なんてない」

お金や自分の優位性を確保したいという気持ちとプライドが渦巻くビジネス界に、こういった考え方をしている人のいかに多いことか。誠意を尽くしても、裏切られたり、利用だけされたり、痛い目に遭うのが、ビジネスという世界における負の部分なのだ。

「正直者は損をする」「真っ当にやっているほうが嫌な目に遭う」「優しい人、誠実な人はなめられる」

僕も一時は本気でそう思っていたが、つまりは自分の地図しか見ることでかできない人が多過ぎるということだ。しかし、本当に損をするのは正直でない人、誠意でない人、約束を守らない人、美学のない人である。今では、こういう人たちの意識エネルギーが見えてしまうので、仕事で絡むことはほとんどないが、僕も長い間、こういう連中のマインドに翻弄されては、忸怩たる思いをしてきたものである。

しかし、世界No.1ビジネススクール、ペンシルバニア大学ウォートン校最年少終身教授であるアダム・グラント氏が書かれた、『GIVE & TAKE「与える人」こそ成功する時代(三笠書房)』という書籍によると、世の中には3種類のタイプの人間が存在しており、それぞれ「ギバー」「テイカー」「マッチャー」と名付けられている。

「ギバー」は自分の利益よりも他人の利益を優先する人たち。

「テイカー」は自分の利益を最優先にする人たち。

「マッチャー」は自分の利益と他人の利益をお互い納得させるようにする人たちを指すという。

世の中ではギバーは「お人好し」「利用されるだけ」、テイカーは「仕事ができる」「抜け目ない」などと考えられ、大半のギバーはテイカーの餌

食になっていると思われる。しかし、ある研究でこの3種類のタイプがどれだけ成功しているかを追跡統計したところ、平均的に成功している割合が高いのはテイクカーだったが、最上段で成功している本物の成功者たちのほとんどがギバーだということがわかったのだという。

こういったタイプ分類以前に、やはり人には美学と品が必要である。

以前の日本人には教育勅語や人生の先輩・指導者としての親、社会がしっかりと機能しており道徳教育が根付いていた。「自分だけの視点」「自分が可愛い」という気持ちは人間である以上当然持つてはいても、そこに「恥」や「人としての美学」「お天道様が見ている」といった第三者的視点を育むことが出来ていたのだ。お金儲けの方法にしても、「みっともないことをしてまで稼いでやる」と思う人は、今の時代ほど多くはなかっただろうし、子供の教育のことで、学校や先生に一方的に持論をまき散らして怒りをぶつけるような親もほとんどいなかった。

『アメリカ人と日本人』という、本項のテーマと少しずれてしまったかも知れないが、「自分のスタンダード」を押しつけ、人を踏みにじってでも自分の益を優先するマインド構造は同類であろう。

自分の利益のためなら人はいとも簡単に卑しくなれる。

関わりたくなくても、自分の地図しか見ない人が多い今の時代では悲しいかな、知らずと関わってしまうこともあるし、それが当たり前の風景になってしまっている。戦後からのアメリカの文化や概念が根付いていく中で、我が国民が失っていったものはあまりにも大きい。

「欧米系の成功法則」に家一軒分使って分ったこと

↑それでも効果のある成功法則

日本で沢山の「成功法則」や「願望実現方法」「引寄せの方法」「稼ぐ方法」といったものが溢れ返って久しい。

僕も若い頃から、「何とか自分の人生を成功させたい」と強烈に願い、この手のものを貪り学んで来たわけだが、先日、この手のプログラムやメソッド、セミナーなどに費やしたお金を、ざっくりと計算したら、514万円ほどになっていた。他にも書籍なども沢山買っているので、最終的には1000万円ほどは使ってたのではないかと思う。

では、本当のところ効果はあったのか？

という話であるが、効果はある。

「価値ある目標を設定する」「鮮明に視覚化する」「紙に書いて眺める」「脳に理解させるために地図化する」「カラーージュをつくって視界に入るところに貼付ける」「声に出して定期的に宣言する」「期限を決める」「はっきりとした数字や状態を決める」「ポジティブに過ごす」「ワクワクする」「メンターを持つ」「タイムマネジメントをしっかりと行う」・・・。

おおよそ、欧米系のは、このようなものに集約できてしまう。

僕も散々やってきた。

そして、27歳のときに自分で飯を食う道に入って離陸。年々上昇気流に

乗って35歳まで猛進した。

これのできたのも、欧米系の成功法則での学びがあったからだと言われている。本冊子では欧米系の成功法則やメソッドに対してNGを突き付けているように思われるだろうが、実は感謝もしているのだ。こういった学びをしている人と、そうでない人とは人生に大きな違いが生じてくることは、同窓会や昔の友人と会うと明白である。読者の中には成功法則や欧米系のメソッドに確信を得ている人もいれば、惚れ込んで実践している人もいるかも知れないし、さらには、そういったセミナーや勉強会の講師の方もいるかも知れない。

幸いにも僕は、欧米系の成功法則やメソッドで、自分の人生を歩むベースを創ることができたことは事実であるし、自分なりの成功を手にすることができている。だがしかし・・・

『欧米系の成功法則』は、日本人古来のDNAが拒絶反応を起こして、反作用を引き起こす可能性があることが否めない。

これらのものの多くは、「成功すること」「稼ぐこと」「勝ち組になること」「豊かに生きること」といったことばかりにフォーカスし、そのブースターが、「個」という意識から発動されてしまっているからである。

日本人は、古来から豊かな自然環境の中で相互扶助の精神の下、協力しながら分かち合いながら、この瑞穂の国と呼ばれる国で、1万年以上も生活して来た「和の民族」なのだ。「和」とは「輪」であり、あの3・11の大惨事の際にも、略奪などもほとんど起きず、多くの人たちが手弁当で支援に駆けつけ、被災者を思いやり、自分のエネルギーを分け合う行動をした民族である。

翻り、2005年8月、アメリカ・ルイジアナ州にハリケーンカトリナ

が発生したときには大規模な略奪が巻き起こり、2008年5月の中国・四川省で起きた四川大地震でも略奪が起きている。

貧困や差別などの問題が背景にあるにせよ、これらの国々と日本人の意識の違いは明白である。逆に世界中の人々が、「なぜ日本では略奪が起きないのか？」不思議でならないといった言葉も多く聞かれたものだ。

災害に遭った不幸な人たちを、さらに追い込むようなことを日本人はしないのは普通のことなのだが世界ではそうではない。

「自分だけが良ければ」「今が良ければ」「他人なんてどうでもいい」ではなく、「自分に何かできることはないのか」「仕事を休んでも駆けつけよう」「食料を差し入れよう」「少しでも被災者に暖かい気持ちになってもらいたい」といった気持ちになる人の何と多いことか。

日本人は、どんなに時代が移り変わっても、その魂の根底に「和」(輪)のDNAが螺旋状に息づいているのである。こういう民族に、欧米系の成功法則は、どこか歪みをもたらしてしまうと僕は思う。

成り上がってみて感じたこと

↑魂の伴わない成功では心がカピカピに乾くだけ

僕が欧米系の成功法則を徹底活用して行き着いたのが、「成り上がり」というこわくてき蟲惑的な終着駅であった。ビジネスや資金運用で大金を稼ぎ出し、人から指示を受けない身分になって、真っ先にやってみたことがバブル時代に憧れていたことである。つまり物欲と色欲を満たすことである。つまり、快楽や欲望への執着駅でもあった。

高級時計を何本も買っては次々に取っ換え、車はイタリアの黄色と赤のオープンカー。東京での住処はウオーターフロントのマンション。美女を乗せた車を操り、都内はもちろん、伊豆や湘南、三浦半島などに出かけては旨い食事に舌鼓を打ち、カシヤン、カシヤンとカッコ良く上下左右に動く機械式駐車場に颯爽と自分の愛車を滑り込ませると、そのまま50階まで続くエレベーターで自分の部屋にスマートに直行できる生活。部屋はクールなインテリアで決め、ベランダにもバーもこしらえていた。もちろん最後のバブル世代であったため、銀座や六本木に頻繁に出かけては大金を使いまくっていた。

誤解して欲しくはないが、欧米系の成功法則やメソッドをブースターにして一定の状態を手にしたからといって、誰もが僕のようなバカな状態になるわけではない。シビアに金銭管理をして、ビジネスや資産運用に徹する人も多いだろう。一定の状態を手にした後のアプローチは、その人自身の感性によるものだからだ。

であるが、あからさまに派手な生活に手を染める者もビジネスや投資に打ち込む者も、おおむね同一の意識状態である。

それは、「自分だけが可愛い」「自分だけが得をしたい」「自分だけが喜ぶた

い」という「個」の意識である。両者の人生アプローチは異なれども、欧米系の成功法則で一心不乱にのし上がった者の共通点は、あくまでも「個」の幸せの追及に陥りがちであることは拭えない。

一代でのしあがって来た人の何割かは、口では社会貢献だなんだかんと言っているが、過去の僕も含め、心からそんなことなどは考えてはおらず、「我欲」、そして「自分だけが」という「個」の意識に拘束をされてしまっているケースも多い。

ビジネスの規模はどんどん大きくなっていても個人の意識成長がここで止まっている人がいかに多いことか。名うてのベンチャー企業経営者をはじめ、若いイケイケの経営者、そして人生を重ねて来ているであろうはずの熟年経営者にさえ、このレベルの意識の人がかなり存在している。

こうした意識の人でもビジネス界では成功してしまう現実があり、また、こうした強欲の人でないと稼ぐことはできないと、まことしやかに語られるほどだ。

今の日本にはビジネスの腕も人間性も人としての器や美学もトータル的に整っている人があまりにも少ないため、目に入ってくるのはどうしても合理的な欧米系の成功法則、成功哲学が染み込んだ目標達成・拡大欲・金銭重視の人になりがちである。彼らは、さらに成功とお金を求めていく傾向があるため、一定の成果を手にしても満足するのはわずかな期間で、また次の刺激を求めて、目はさらに遠くを見据えていく。

そんな姿を当然のごとく見ていると、自分も無意識にそういったマインドに染まってしまうものだ。これでは、「足るを知る」といった日本古来の意識状態からはかけ離れ、何を手に入れても心は乾いた状態が続くだけである。

極論ではあるが、欧米系の成功法則はとことん成長・成功し続けることに意識を仕向けられてしまう。これでは、どこかで破綻をするし、限界のある地球や自然に決して優しいものではない。そして、人間も自然の一部であって成功マシンではないのだ。

第四章 日本人は「和の成功法則」を学べ

ビジネスフィールドには餓鬼（がき）ばかり

†「カネ」と「欲」の亡者が徘徊する荒野にて

第三章では、日本社会における欧米系の成功法則や二項対立思考の弊害と思われることを中心に、主にビジネスフィールドを通じて僕が体験したこと、感じてきたことから展開させていただいた。いささか強引な話の内容ではないか。そう思われる方もお見えであろうが、そういう方々であっても、世の中は、「なんと自分視点の人間が多いのだ」と怒りや落胆を覚えた経験があるはずだ。

これらの全てが戦後持ち込まれた欧米思考や欧米系の成功法則などとリンクしているとは言えないが、日本社会に対し、「個」と「二項対立」という思考経路を大きく開けるきっかけをつくったのではないか。という持論はそれほど的外れではないように思う。その大きな理由がビジネスを通して1000人を超す経営者や自営業者と触れ合った中で、「この人には心底惚れた」という人がほとんど居なかったという事実。逆に「酷いことをする人だな」「人としてどうかと思う」「嘘や裏切りを何とも思っていない」という人の割合が多かったという落胆があった。

もちろん、僕の人間レベルが低かったために、このレベルの人たちの意識ゾーンとシンクロしてまったという事実もあるかと思うが、それを差し引いても、お金の分捕り合戦を繰り広げるビジネスフィールドには、「今だけ」「自分だけ」「お金だけ」「損か得か」といった意識に支配されている人が、かなりの割合を占めているように思うのは僕だけではあるまい。

欧米系の成功法則では、人生には色々な分野での「成功」があると説かれ

ていることが多く、「経済的成功」「社会的成功」「心の成功」をはじめ、欧米系の6分野、8分野、10分野といった形で分類し、その全てを充実させていくことを目標にさせている。

この考え方は、とても耳障りが良く、ほとんどの人から反論が起きないほどパーフェクトであるが、限られた人生の時間で、これら全てをバランス良く充実させ成功させることは簡単ではないことにいずれ気がつくだろう。欧米系の成功法則を学び、こういった教えが本当にこの世で機能しているならば、世の中には素晴らしい成功者で溢れ返っているはずだ。

残念ながら僕が見た成功者は、どこまでいっても、「カネ」「カネ」「カネ」「ウリアゲ」「ウリアゲ」「リエキ」「リエキ」「カクダイ」「カクダイ」と叫びながら、自分の欲の心を満たそうとビジネスフィールドを徘徊する餓鬼（がき）のような人ばかりであった。それは幼い心のガキとも言え換えられよう。こういう人のことを手放しで憧れ、「経済的成功者」として崇めている人も多く、そのエクスタシーに浸り続けたいがために、ますます彼らは経済化されていくのである。

欧米系の成功法則を学んでも成功しない人たち

↑成功法則に苦しむ人たち

経済的成功という名の下に、「カネ」と「欲」を満たし続ける人がいる一方で、成功法則や願望実現方法、引寄せの方法、稼ぐ方法などを学んでも意図したことが現実化しない人がいる。数でいえば圧倒的にこちらのほうが多いだろう。

彼らは、こういったセミナーや勉強会に頻繁に出かけていつては知識を吸収し、関連書籍も数多く読んでいたりするのだが、なぜか形になっていない。それは一体なぜなのか？

人の「成功したい」「願望を実現したい」という思いの深層心理には、「不安」「不調」「不足」「恐れ」「嫉妬」「焦り」というマイナスのエネルギーが隠されている。このマイナスのエネルギーをそのまま放置したまま、上から被せるように目標を紙に書かせたり、期限を決めさせたり、ビジュアライズさせたり、毎日アフアーメーションさせたりと、欧米系の成功法則や願望実現方法は心の理解を得られないまま強制的にそういった行為を推奨する。

実はこの行為を、**4次元（3次元＋時間）空間に囚われている**という。

しかし、本人のもともとの気質や潜在意識に刻まれた傷やトラウマ、長年の心のクセなどに、いかにポジティブな言葉は行動を仕向けたとしても、そのほとんどは脳が壁をつくって拒否してしまふ。これはブルガリアのゲオルギー・ロザノフ博士（1926～2012 医学博士・精神医学・心理療法・脳生理学）が、旧ソ連のカルコフ大学に提出した学位論文の中でも発表されている。さらには、その思いに至った目標や願望は本当に当人の人生にとつ

て必要なものなのか。絶対に実現しないといけないものなのか。それが魂レベルでは曖昧なことも多く、深く精査していくと、単に他人からの影響や憧れから来ているといったことも多い。つまり本来、その人にとっては必要のない成功や願望であつたりするわけだ。これらの要因もあつて多くの人の願望は叶わないのだが、欧米系の成功法則や願望実現方法では、ほとんど触れられることなくメソッド化してしまっている。

「こんなに必死に、毎日ビジュアライズやアファーマーシオンをしているのに、何で思い通りにいかないのだろう？」

**「こんなに成功や願望実現の勉強をしているのに形にならないの
だろう？」**

そう嘆く前に、そもそも「成功の捉え方」が間違っているのではないか？

沢山のお金を自由な立場でシステムチックに稼ぐ。今年の収入より来年はもっと稼いでやる。高級住宅に住んで車はフェラーリ、腕にはスイスの機械式高級時計や高級バッグ。

こういった成功目標を設定する人があまりにも多い。言い換えれば、成功するためにがむしやらに成功を追い求めているのである。これを行っている限り、決して自分本来の成功をつかめることはないにも関わらず、多くの人がこの罠にはまって抜け出すことができず、何年もスタック（立ち往生）しているのだ。

成功とは自分オリジナルのものでなければ叶わない。

人からの受け売りの成功を追いかけても叶うものではなく、叶っても一時

期であり、いずれ崩壊に向っていくことを知ることだ。多くの人たちは、「自分にとっての本当の本物の成功」ではなく、誰かさんがつくりあげた成功を手に入れるために欧米系の成功法則を使って必死に頑張っている。

これを人生のムダといわずとして何と呼ぼう。

また、欧米系の成功法則をブースターにして成功や願望を実現しよとする人が陥りやすいのが、競争に勝つことで望む状態を手にしよとすることだ。「誰かに勝つ」「社会に勝つ」「あいつに勝つ」といったエネルギーが強く、「競争に勝って成功する」「稼ぐ」という意識でいる限り、勝って「心が満足する」のは一瞬である。なぜならば勝つことで「成功」や「稼ぐ」ことが出来てしまったという体感をする、次の対戦対象が現れてくるからだ。

それは固有の人や組織でなくても、お金や規模というものでもそうだ。次の目標対象が視界に入ってしまう以上、それは脅迫観念となって、次の競争に自ら飛び込んでしまうようになっていく。しかし、次の競争では敗者となる可能性もあるため、心の奥底では本人が認識していようが、いまいが、「恐怖心」や「緊張感」、次の状態を手に入れたがための、「焦燥感」「切迫感」などに支配されている人も多い。

こういう人の特徴は、人生の目的のほとんどがビジネスやお金儲けになってしまっている。競争意識、切迫感からの成功意識という亡霊に人生を乗っ取られたのも同然である。

誰もいわない成功のパラドックス

↑今のあなたでは未来は現象化しない

欧米系の成功法則や願望実現法とは、ことのつまり、「自分から夢や目的をつかみ取りに行く」というものである。この「つかみ取る」という概念であるが、あまりにも正論過ぎて誰も疑問に思うことはない。しかし、「つかむ」という概念だからこそ、誰かからの受け売りの「成功」を設定しがちになるのだ。目に見えている他人の成功状態や社会で成功とされる状態はイメージしやすく、つかみ取るターゲットとして単純に設定がしやすいからだ。

未来の「成功している」自分のイメージあってこそその成功。実はこれこそが問題なのだ。

え、なんでよっ？

イメージには二通りあり、堅実に形にできそうなイメージと荒唐無稽なイメージだ。あなたの収入が今、年収で500万円だとして3年後に600万円になっている。これなどは実現が堅そうなイメージである。しかし、3年後に年収2億円、六本木ヒルズに住んで、車はランボルギーニ、彼女は芸能人といったイメージをする人も中にはいる。

これらのイメージ設定に対し、意識下の感情はどうなっているのかご存知だろうか？

前者は自分の本当の可能性を信じておらず、意識下では安全パイの目標設定を行っている。後者は何の根拠やリソースもない状況で、ただ盲目的に夢や希望の目標設定を行っている。

これらのイメージ設定は実は二つとも間違っている。それは感情の恐れがある状態でのイメージであり、単なる欲望からのイメージだからである。後述するが、これらは意識階層でいうと最下部にある二階層からの意識発信なのだ。

では、どうすればいいのだ。

それは、「目標設定をしない」「未来をイメージし過ぎない」ことに限る。

そんなアホな！

アホではない。本当のことだ。

「成功したい」「幸せになりたい」という意識の本質は、「渴望」「不足感」である。このような思いを源泉にしている限り、4次元空間（3次元＋時間）で成功や幸せが手に入るのは、ほんの一部の人だけなのだ。

だから、そんなことはしなくてもいい。

本当の成功や幸せを確信したとき、「どうせそうなる」のだから。

さて、欧米系の成功法則を実践し、非常に疲れたという人、違和感を覚えるという人が後を絶たない。それは日本語族である、あなたのDNAがそれを理解し、納得していないからだ。つまり、**日本人に合わない方法だからである。**

その理由の一つは、「成功を勝ち取るぞ!」「願望を実現してみせる」と勇んで目標設定をし、宣言するのは簡単だが、それを手にするまでには相当のストレスを強いられ、それに打ち勝ち続けなくてはならないことを経験者であれば理解できよう。芸能人や会社経営者が自分の子供だけには、このような道に来て欲しくない。と語っているところをしばしば目にするが、それだけ成功するには凄まじいストレスに勝ち抜いてきたという思いがあるからである。そんな思いを愛する子供にはさせたくないという親心からだ。

ストレスへの耐性には個人差もあるが、それ以前に日本人は特にストレスに弱い国民だというデータがある。ストレスへの耐性の違いはセロトニンという神経伝達物質の働きに関係しており、セロトニンというホルモンは不安や恐怖を弱めてくれる作用があるのだが、セロトニンの活用がスムーズに行われなくなると精神作用が低下し、鬱状態になりやすくなるといわれている。それを紐づけるように日本人の鬱状態の97%はストレスが原因とされており、日本での自殺者は3万人強で鬱状態の人がほとんどであったという報告もある。

セロトニンの活用にはホルモンを受ける受容体の遺伝子に関係していており、LL型遺伝子を取り込みがたやすく、短いSS型遺伝子を取り組みにくいために、SS型遺伝子が多い人はストレスを乗り越える力が弱く、日本人の約68%はSS型遺伝子のみというデータが出ており、SS型遺伝子とLL遺伝子の両方が約30%、LL遺伝子のみは約2%となっているそうだ。

一方で、自己啓発大国のアメリカ人は、SS型遺伝子のみが約19%、SS型遺伝子とLL型遺伝子の両方が約49%、ストレスに強いLL遺伝子のみの人が約32%もいるそうだ。古来から日本人は、自然や海山の食べ物に恵まれた中で農耕民族として比較的穏やかに生活して来ていることに起因しているようだ。翻り、アメリカ人のルーツである西洋人は、狩猟民族として激しい生存競争を強いられる必要性があったために、強いストレスに打ち勝つように遺伝子は発達してきているのだ。

このような西洋の狩猟民族がつくりあげた、「成功法則」や「願望実現方法」「自己啓発」などが、ストレスに弱い遺伝子を持つ日本人に遂行しにくいのは、ある意味当然であろう。

また、目標や未来を設定することに偏重し過ぎると、今そのものが未来のための一日という意識になりやすい。欧米系の成功法則では目標とする未来のために今日をどう使うか、どう過ごすか、といったことを重視するが、別の見方をする、今日というかけがえのない一日が未来への生け贄になってしまう一面があるわけだ。

「成功したい」「未来はこうありたい」「望むものを手に入れたい」という気持ちの発信の根が、「今、成功していない自分」「今、あまりよくない状態」「今、望むものが手にできていない自分」そのものである限り、その状態の自分がどのように立ち振舞おうとも、多くの人にとつての未来は今の自分の延長戦の状態を手に入れるだけになるのだ。

日本に溢れ返る多くの欧米系の願望実現メソッドの最大の欠陥は、日本人に連綿と引き継がれているDNAの特性への理解もなく、また、今そのものの自分の意識の問題もクリア、クリーニングすることなく、単に「未来」「目標」「夢」「願望の実現」といったことに意識を向けさせるように組み立てられているのだ。これでは歪みを生むばかりである。

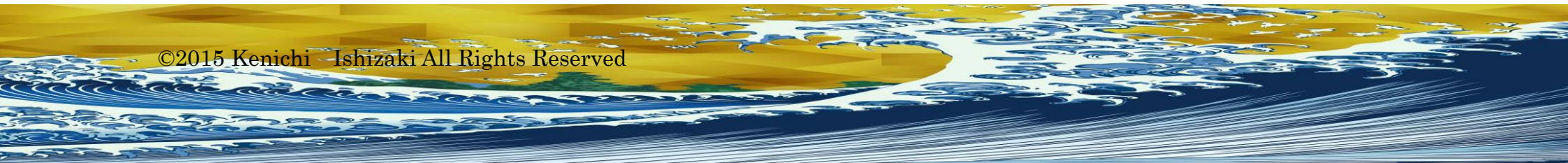
また、欧米系の教えの中には、「自分の1時間は幾らの価値があるから、それ以下にしか換算できない物事には使わない」というものがあり、それを採用し、タイムマネジメントする人も意外に多い。確かにどうでもいい物事や、どうでもいい人に時間を割くことは僕も賛成しないが、心が瑞々しかった幼少期に、そんな基準を持って一日を過ごすような少年少女はいないように、人はその瞬間を生きているのであり、未来のために生きているのではない。今、この瞬間を行きているのだから。そのために、

日本人のあなたが最適に成功するためには、未来ではなく今その

ものを扱うことがキモなのだ。

日本人のあなたは、欧米系成功法則や願望実現方の「真逆」をやればいい。

実にシンプルである。



「新しい成功法則」へ

↑闇の中で疲れ果てた、その後で

皆さんの中には僕が今まで書いて来ている内容に疑問を持ったり、違和感や不信感を持っている人も見えよう。特にこういったメソッドのトレーナー的な仕事をしている人は怒りを覚えているかも知れない。

僕も積極的に欧米系の成功法則を実践して来たからこそ、三十代前半で自分が過去思い描いて来た夢や状態のほとんどを手に入れることが出来たのだから、こういった成功法則や願望実現方法には感謝をしている。しかし、一生涯、欧米系の方法で自分を突き動かしていくことに疲れを感じていた。僕は生身の人間であり成功マシンではないのだから。それに加え、僕なりに強烈に思い描いていた、「成功」を手にしてしまったために、次に、どうしても手に入れた状態を思い描くことができなかったのだ。それどころか、手に入れた状態を手に入れたしまった僕は、その後エネルギーの反転作用が起き、立て続けに大変な状況に陥ってしまったのだ。

手短かに伝えると、年収数億円を数年続けた後、35歳の夏、ある事件に巻き込まれ、総資金の90%を持ち逃げされたことからそれは始まった。しかし、今までのビジネス経験や欧米系の成功法則でさまざまポジティブ思考に切り替え、あるご縁から医療系ベンチャーの社長を務め、また、自らのビジネスでは月収ベースで700万円ほどまで持ち直すことができてしまったのだ。

しかし、そこからが本当の闇だった。失った資金を取り戻そうと、さらに様々なビジネスを急速に立上げたことが仇となって経済状態が急速に悪化。悪いことは重なるもので、同時期、複数の詐欺・裏切りを経験。税務署にも

法人担当、さらには個人の特別チームから延べ2年間に亘って徹底的に調査をされたのだ。

極めつけは、父がある日突然倒れ、そのまま植物状態になり1年1ヶ月後に死去。僕は起業してから自分の夢ばかりを追いかけ、父親孝行をあまりしてあげることができなかったことに心から後悔した。

このような状況にありながらも毎月巨額の支払いに追われる身に落ち、漆喰の闇をさまよい続けていたのだ。35歳の時の巨額持ち逃げ事件から、すでに3年間が経っていたが、僕は毎日心が休まることはなく、いつ人生が崩壊してもいい状態にあったのだ。序文のインド人占い師に観ていただいたのは、この頃の話である。

そんな時に、ふと飛び込んで来たのが、ハワイの癒しのメソッドである「ホ・オポノポノ」だった。今までの成功法則や願望実現法とは根本的に異なり、「ありがとう」「ごめんなさい」「許して下さい」「愛しています」という4つの言葉を使って、とにかく潜在意識をクリーニングし続けることで、自然と人生が適正化されていくというものであった。

「こんな簡単な方法で、そう上手く行くものかよ」

そう思ったが、ホ・オポノポノの提唱者のヒューレン博士の風貌を見る限り、全く怪しいところがなく親しみが湧いてしまったのだ。今までの欧米系の成功法則や願望実現法のような力みやパワーのエネルギーというものもなく、とても穏やかなメソッドであったため、すぐに惹き込まれてしまった。

人生のどん底に落ちたことがある人なら理解できると思うが、こんな時に、非常にパワーを要する、ビジュアライズやアファーマーション、目標を紙に書く、期限を決めるといった「成功法則」や「願望実現法」をやる気にはなれないものだ。なぜなら、そんなポジティブな気持ちになどなれないからだ。

とにかく、「祈ること」「拝むこと」しかできないのが、こういった時期の心の状態なのだ。そういう意味では、「ありがとう」「ごめんなさい」「許して下さい」「愛しています」という4つの言葉を吹き続けるだけでいい、ホ・オポノポノに救いを求めたのは自然の流れであろう。

そして、僕はこの「ホ・オポノポノ」のセミナーにすぐるように申し込んだのだ。

癒しの成功法則と潜在意識のクリーニング

† 自然な形で人生が適正化されていくならば？

当時の僕は漆喰の闇の中にいて毎晩日本酒を浴びるほど飲んで、自分の愚かさを呪い、傷つけた連中を呪い、嵌めた連中を呪い、世間を呪い、神を呪ってはわめいていたのだ。自分のことは棚上げし、「世の中は何て残酷なんだろう」「人生とは一体なんだろう」。そんな思いにはまり込んでいたのだ。一方で、現状から抜け出すことができるならば、なんでも試してみようと思っていた。

そして、ホ・オポノポノのセミナーに参加をした。

場所は大阪であったが、400人以上の人達が、この新しい教えに興味と共感を抱き集まっていたことに僕は衝撃を覚えた。ヒューレン博士の教えは非常にシンプルで会場からのどんな厄介な質問にも、「ありがとう」「ごめんなさい」「許して下さい」「愛しています」という4つの言葉を呟き続けるだけでいい。としか答えなかった。簡単に言うと、この言葉を呟くことで潜在意識に溜まったネガティブなエネルギーをクリーニングし、そこからやって来る思考を手放す。というものだった。

「たった4つの言葉で人生が変わる」。これならば疲れ切っていた僕にも何とかできそうだったため、ことあるごとに、この4つの言葉を呟き続けることにしたのだ。

すると今まではない癒された気持ちになっていったのだ。今までは、とにかくアグレッシブに目標や夢を追い、毎日をヒリヒリ生きていたのだが、ホ・オポノポノを知り実践をし始めたことで、少年の頃のような穏やかな心

の状態を感じるようになったのだ。そこで僕は「ハッ」と気がついた。

潜在意識に溜まったゴミを掃除することの大切さである。

そこからはとにかく、ヒプノセラピーなど、癒し系のセミナーや勉強会に積極的に参加をした。そういった学びの中から目標や夢を追うこと以上に、心を整えることの重要性を理解したのである。

なぜならば僕らのいる社会は、競争社会であり、情報洪水社会であり、制約社会であり、自分さえ良ければというネガティブなエネルギーに満ちているからだ。こういったものに僕たちが毎日触れて生活しているわけである。心の中にそういったゴミが溜まり、知らぬうちに潜在意識に刻み込まれていくのだ。僕もブルドーザーのように成功を夢見て、20歳の頃から18年間も突っ走って来た中で多くのゴミを溜め込んでいたのである。

自分がつくりだしてきたゴミ、他人から受けたゴミ、社会から受けたゴミ、これらを全て本気でクリーニングすることをしなければ、僕の人生が適正化されることはなく、ゴミを抱えたまま明日を迎えるだけだということを悟ったのである。

和の成功法則との出逢い

↑ 遂に出逢ったラストリゾート

ホ・オポノポノをはじめとする潜在意識のクリーニングメソッドを取り入れてからはネガティブな感情をコントロールできるようになり、長い間人生の一部になっていた、夢や目標を設定し、ひたすらそれに向って日々を過ごすという欧米系の成功法則やビジュアライズ、アファーマーシオンといった願望実現法も完全に手放していた。そして、少しずつ自分や周りの状態が変化をしていることを実感していた。

僕が切実に望んでいたのがスピードであった。アナログ的な潜在意識へのクリーニングでも十分な変容を感じてはいたが、まだまだ多額の支払いに毎月追われ、ビジネスのほうもボチボチの状態が続いていた。この状況をいち早く抜け出したかったのだ。僕は元来、探究心が非常に高く、興味を持ったことにはトコトン追及するというクセがある。そんなとき古神道や言霊といった日本古来の叡智と出逢ったのである。

「神道の概念に未来も過去もありません。永遠の今があるだけです。どんなことも今ここににあるのです」

「最強の状態とは、何もないけれど何でもあるというゼロポイント・フィールド（すなわち空のような）という状態です」

「そして、その空の状態から意識を発動するのです」

ある所で出逢った方が、神道の概念をこのような感じで語ってくれたとき戦慄が走ったのである。なぜならば欧米系の成功法則のように、「未来」に焦点を向けさせながら今をサクセスマネジメントするのではなく、「今そのものを生きたこと」「すべては今ここにある」という全く新しい概念だったからである。アインシュタイン博士も、「頭の中（心理的）にしか時間というものは存在しない」というようなことを結論づけている。そして本来、日本人は今そのものを生きていたように思う。

しかし、「成功」「お金儲け」「願望実現」といったことばかりを意識するようになってから、今そのものを生き切れなくなっているのではないか。

その方は、古神道の叡智をこう結んでくれた。

「祓（はら）いにはじまり、祓いに終わる」

自分の全てを祓う。

穢れも、起きていることも、嫌なことも、恨みも、憎しみも、苦しいことも、辛いことも、逆に、いいことも含めて祓い清める。これは正に、ホ・オポノポノの叡智と同じである。

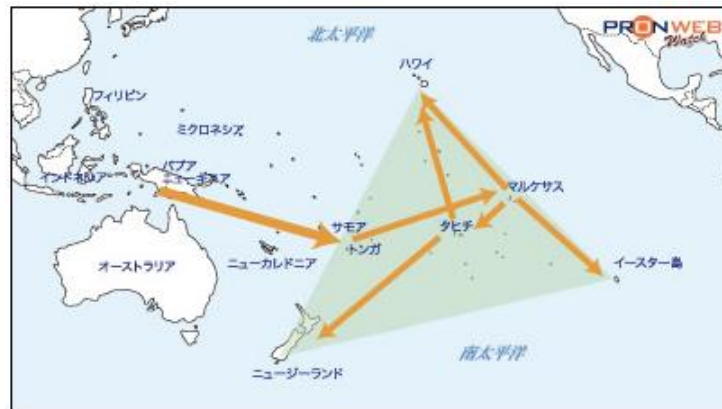
そして、言霊との出逢いである。

（言霊の概念は難解なため、僕なりの表現をさせていただくことにする）

「言霊（日本語）50音の一つ一つは神であり独自のエネルギーが宿っている。それが50通りの働きを行うことにより、あらゆるものを創造していく。これを言霊百神という」

日本語の音節は必ず母音で終わる世界でも極めて珍しい母音言語といわれ

ている。例えば、「夢」という言葉をローマ字にすると「YUME」となり、最後は「え」という母音で終わり、「愛している」という言葉も「AI SHI TERU」となり、最後は「う」という母音で終わる。このように、子音と母音がセットになっていて、語尾が子音で終ることはない。このような特徴を言語は日本語、ポリネシア語、ハワイ語など限られた言語だけなのだ。



ホ・オポノポノという叡智も母音言語のハワイで発祥したことも決して偶然ではないだろう。

また日本語は主語がない言語だと言われている。主語とは何かに対して言葉を発するときに、「私（I）は」と、いちいち誰がこの思いを発しているかを付記しないということだ。例えば、愛する人に対して「愛している」というだけで十分通じるし、英語のように「I love you」と、いちいち「私はあなたを愛している」と言わないのが日本語である。

これは「私（I）」という「個」の視点から常に意識を発信する言語を使う民族と比べ、言語そのものに「個」の視点が希薄な日本語を使う日本人は、

他の存在と溶け合い、同一化した「公」の意識から自然に言葉を発信できる民族であるという意味にも取れよう。

このように言語そのものに、「個」の概念がもともと希薄な日本語族に、「私（I）」は「という「個」の意識レベルから「成功」や「願望実現」を成し遂げさせようとする欧米系の方法を運用しようとしても、日本人の心に刻み込まれたDNAが拒否をするため、多くの人は「成功疲れ」「願望実現疲れ」に陥るだけであろう。

そういったことを踏まえ、日本人には、日本語の特性や日本人の心のDNAに適した「成功法則」や「願望実現法」とも呼べる方法の運用に切り替えていくことをオススメしたい。

欧米系の方法では、成功や願望を実現した状態をイメージしたり、言葉に出し続けさせることをよくやるが、その状態を切望するほうの意識エネルギーのほうが現象化されやすいということを理解しなければならない。

例えば、「金持ちになる」という意識を常に発信し続けていると、今現在の意識状態は「金持ちでないから金持ちになりたい」というのが根っ子であるために、「金持ちでない」という不足意識が、「金持ちになりたい」という思いのブースターになっているために、そちらのほうが実現してしまうということである。

日本人に適した方法とは、そうではなく、言挙げ（言葉にむやみやたらに出さない）せず、意図のみを明確にしながら、とにかく祓う。祓いながら、今そのものを生き切るということである。「祓うことで、穢れた自我が抜け落ち、そうして初めて、和（＝統合）が可能となる。つまり、自分にないのを統合することで、成功への近道ができるということなのだ。この祓いの技法こそ、和の叡智が宿っているのだ。

それを「和の成功法則」と呼ぶことにしたい。

第五章

「和の成功法則」はこうして実現する

人の意識階層を知る

†言霊学では人の心は五階層になっている
げんれいがく

言霊の概念によると、人の心は日本語50音の「ウ・オ・ア・エ・イ」という母音によって表わされる五界層宇宙より発現する心の性能を与えられているとされている。

言霊ウは五官感覚に基づく本能的な欲望活動であり、「美味しいものを食べたい」「金持ちになりたい」「素敵な異性を手に入れたい」といった「本能」に基づく意識ゾーンである。「オ」は経験知、すなわち生まれてから色々と見聞きしたこと、学んだことをベースにした記憶と整理の働きをする意識ゾーン。「ア」は人が持つ喜怒哀楽といった感情の意識ゾーンである。「エ」は言霊「ウ」「オ」「ア」からの「欲望」「経験（記憶）」「感情」の優先順位づけや調整、コントロールといった知恵を司る実践知の意識ゾーンである。そして最後の「イ」であるが、言霊「ウ」「オ」「ア」「エ」の四つの意識ゾーンを支えるとともに、それを情報（宇宙）空間に発振し、人生創造を行う特別な意識ゾーンといわれている。

言霊学では母音「ウ・オ・ア・エ・イ」を主体としたときに、その客体としての半母音「ウ・ヲ・ワ・エ・ヰ」、母音と半母音同士を結びつける働きがあるとされる父音「キ・シ・チ・ヒ・ミ・リ・イ・ニ」の概念があり、この十七文字が五階層の構造を持つて、まだ具体的な現象になる以前の意志としての先天構造としている。これら十七音が活動を起こすと、三十二の後転

構造の子音が生まれ、現象化に向かっていくという。

八父韻									
キ	ニ	ヒ	リ	シ	ミ	キ	イ	チ	イ
エ	32の現象子音								エ
ワ									ア
ヲ									オ
ウ									ウ
半母音（客体）									母音（主体）

言霊学は相応の理解が必要なため、本書ではこれ以上深堀しないが、日本語の母音「ウ・オ・ア・エ・イ」の概念だけは人の心そのものであるため、ざっと理解をしていただけるといいかと思う。

現代の日本人の多くが、自然や他者を制圧してでも自己の目的の達成を図ろうとする二元論的な欧米式の考えや価値観に染まってしまったため、ほとんどの人が「ウ」の欲望、「オ」の経験知（経験や記憶）から、「エ」「個」「自分」といった三階層のみの視点で物事を捉え、成功や願望においても。この意識ゾーンから発信し、必死につかみ取ろうとしている状態から、より上位の階層にある「エ」「イ」といった実践知、創造意志の概念を理解し、活用していくことが望ましい。

僕も以前、成功病、お金儲病に取り憑かれていた時期は、「ウ」「オ」「ア」のみから行動を起こしていたことが今では理解できるから、とても興味深い。

意識の階層を上げると見えてくる世界

† 日本人にある「公」の意識のDNA

今、世界は欧米のスタンダードで動いている。日本においても戦後、このスタンダードがしっかりと染み込んでしまっているために、今日より明日は豊かにならなくてはならない。事業を起こせば年々成長させ続けなくてはならない。

そして何よりも、自分は幸せになりたい。そのためには、ビジネスや人生という鉄火場で勝ち続けていかななくてはならない。

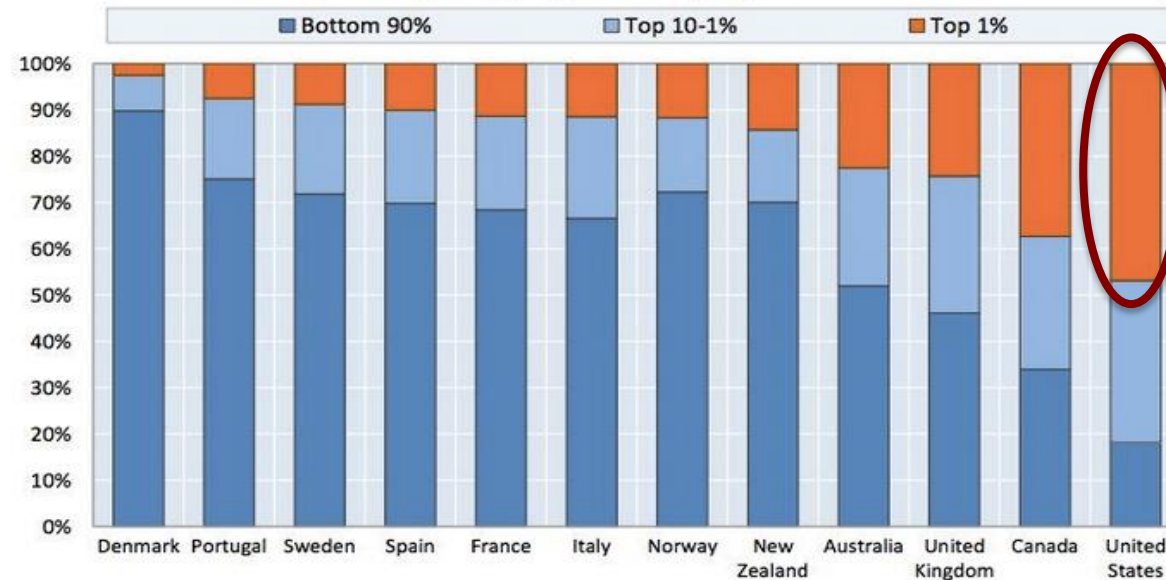
これらの考えがあったからこそ科学技術も進歩し、世界は著しく発展したわけであるので全てを否定するつもりはないが、世界の国々がこぞって成長を望めば、いずれ地球のキャパは崩壊してしまう。ビジネスをとっても、本来に毎年、前年対比で成長させていかなければならないものなのか？「足るを知る」といった概念ではいけないのだろうか？

アメリカでは特に顕著であるが、わずか1%の超富裕層が国民全体の富の半分を所有しているのだ。もちろん合法的にビジネスや投資運用でこのような富を築いている人がほとんどであろうが、自然界ではありえないイビツな構造である。もし、神という存在がいるのなら、このような構造をどうお思いになるだろうか。

アメリカでは、トップ1%の人が
全人口の約半分の資産を持ついびつな社会

3 In some countries, one fifth or more of total income growth was captured by the top 1%

Share of income growth going to income groups from 1975 to 2007



行き過ぎた資本主義、拝金主義、拡大主義はいずれ地球を崩壊させていくことを誰もが気付き始めている。これなども、「I」「個」「自分」の視点である、欲望、経験、感情といった三つの階層からの意識発動が行き過ぎた結果である。

一方で、古来から日本人は道徳心や客観視を持って物事を判断できる民族であり、実践知「エ」が心のDNAに備わっている民族なのだ。これは「公」

の意識といってもいいだろう。

だからこそ、震災でも他国のように略奪もほとんど起きず、また多数の自販機があっても、ほとんど荒らされたりしない。また、少し前までは一億中流社会と呼ばれ、富もまんべんなく行き渡っていた。日本人は「自分だけが良ければ」という概念が希薄な公の視点と道徳心を持ち得ていた。

こういった民族であるがために、「個」の視点に拘束されてしまう成功法則や願望実現法を実践したところで、どこか心が拒否をしてしまうのは当然なのだ。

日本人にとって望む状態を手にするには、「欲」「経験」「感情」だけではなく、一段高い「公」の視点、すなわち「エ」（実践知・道徳心）の視点から、自らにとって最良の成功や、ありたい姿をイメージしていくことがポイントだろう。

そういった「実践」があつてこそ素晴らしい人や情報と出逢っていくものなのだ。自分の意識レベルが、「欲」「経験」「感情」に囚われているうちは、おのずと出会える人も情報も、同じレベルと引き合うのは言わずもがなである。

日本語の真の力

† 日本語は清明な願望実現言語である

今までお伝えしてきたように、日本語の5つの母音には階層化の働きがあるため、物事を「I」「個」「自分」の視点だけに留まらず、物事をより俯瞰的に捉えることができる特徴がある。例えば、「成功したい」「稼ぎたい」と言葉を発した時点で、それはエネルギーとなって放出されることはイメージできると思うが、どの階層からエネルギーを発しているかを、普段僕らはあまり意識することはない。

同じ「成功したい」「稼ぎたい」という言葉であっても、自分の欲やテクニック（経験）を満たすためのものなのか、自分の見栄（感情）を満たす欲なのか、それとも自分が社会に貢献するために成功し、稼ぎたいと発しているのかでは、エネルギーの粒子の細かさは変わってくるのだ。

本来、心の五階層を自在に行き来できる日本人であるならば、より高い意識の層から成功や願望を設定したほうが、「I」や「個」「自分」といったゾーンから思いを発信するよりも実現度は高いはずである。

特に、五階層目にある「I」の創造を行うための層から、あなたの思いを発信ができるとするならばいかがであろうか？

それを行うためには、自分の心の状態を五階層にまで高めて、自在に階層を行き来できるようにしていかなくてはならない。

言霊「I」の創造意志情報によって、人の心を構成する言霊五十音のエネルギーの働きが適正化され、その思いが存在次元に現象化されてくるのだ。そ

して、このような働きを内在する言語として、日本語は唯一無二であり最強言語だといわれているのである。

『万葉集』で山上憶良はこう詠っている。

神代より 言い伝えで来^けらく

そらみつ 大和の国は 皇神^{すめかみ}の 厳^{いづく}しき国

言^{こと}霊の 幸^{さち}はふ国と 語り継ぎ 言い継^{つぎ}がひけり

要約すると、「神代の昔から言い伝えられて来たことであるが、日本という国は天皇の祖先神の神威がゆるぎない国であり、言霊の働きによつて成り立っている国であり、そう言い継がれている」

さて、何となくではあるが言霊の輪郭は理解できたであろうか。

「いや、納得できない。科学的根拠を示して欲しい」そんな声も聞こえてきそうであるが、あなたも小さい子供やペットあやすときは自然に高音の領域を使つて、「よしよし、いい子だね」とやったことがあるだろう。低い声で、「よしよし、いい子だね」とやると、小さい子供やペットは怖がることを本能的に知っているからだ。また、植物に毎日「可愛いね」「愛しているよ」と常に話しかけると元気で美しく育つが、「バカヤロー」「お前なんて枯れてしまえ」とやると、本当に萎れてしまうという実験結果が幾つも報告されている。

量子力学によると、この世に存在するものは全てエネルギーであり、それぞれ独自の振動をしているといわれている。言葉も独自の振動を持ったエネルギーであることに異論はないはずだ。

この“独自の振動を持ったエネルギー”の中でも日本語は一万年以上生き抜いてきた清明な言語であり、五十音全てに神が宿り、一音ごとに意味と働きがある言語であるという。そして、世界に目を向けてもこのような言語は日本語以外に存在しないといっても過言ではないのだ。

日本人及び日本に生まれ育った者は、日本語の本当のエネルギーを理解し、運用できるようになるべきである。

日本語（言霊）を使って成功するために

↑キモは周波数と潜在意識の抵抗回避である

日本語に独特のエネルギーがあることは何となく理解できたかと思う。まだピンと来ない人でも、日本語は一万年を生き抜いてきた言語であることから、それだけエネルギーが清明な言語だということは感覚的に捉えていただけたのではなからうか。

では、日本語（言霊）を使って、どのように成功や願望を実現していけば良いのだろうか。

日本語は母音に限らず、全ての五十音に神の名が付けられ単独の意味が備わっていることから一文字単独で意味を成す言葉ということで「一音語」と呼ばれている。これは英語のように一音語がほとんど存在していない言語と異なり、情報量も多く、周波数も高いという。

その一方で、日本語によるアファirmーションは、その構造要素から発信性が英語などのシンプルな言語よりは難しいという側面がある。そのため思いや願望をビジュアライズしたり、アファirmーションしようとしても、当然日本語が立ち上がってくるわけだから、その発信性にスポイルされてしまうのだ。

このことについては、著名なセラピストの石井裕之氏も英語でのアファirmーションを提唱しているようだが、これも日本語でのアファirmーションの限界を様々な経験から理解しているからであろう。

また、欧米系の引寄せ法によくある、「望む結果を手にした状態を過去形（すでにそうなった）で宣言する」だけのアファirmーションでは潜在意識にあるネガティブな感情やブロックによって拒否されるために、やればやるほど

そのような結果を手にできない。という感情が心の中で強化されてしまい、
ついには疲労感や虚脱感も生じかねないのだ。

これをクリアするには、第一に、あえて自分のネガティブな感情を綴り、
第二に、そのネガティブな原因の対象であろうものの視点からの言葉、第三
に、自分のネガティブな感情に対する俯瞰した言葉、そして第四に、第一、
第三を踏まえた上で、どのような気持ちで行動やするのかという言葉、最後、
第五として、自分はそれを手にしたこと、どのような貢献ができ、どのよ
うな人生が展開できるのかといった「公」の視点での言葉を綴るのだ。これ
で「個」の視点から「公」の視点までの階層を網羅できるのはもちろん、潜
在意識からの抵抗も限りなく受けなくて済んでしまう。

例えば、ビジネスで成功したいという思いがあるときの構文であるが、こ
のようにしてみると良い。

私はビジネスで成功したいが、経験も、資金も、人脈もない。さらに今は
超成熟社会であるため、そう簡単に参入できるビジネスはなく、また簡単に
立ち上がるビジネスでは、誰もが同じように参入できるように継続発展でき
ないだろう。しかし、自分が今は何のリソースもなくても、どんな事業家だ
ってはじめはそうであつたわけだから、それを憂うのはやめよう。とにかく
自分ができることが必ずあるはずだし、チャンスや必要な情報、人脈は手に
入るはずだから、それを信じて日々丁寧に過ごしていこう。そうすれば必ず
自分に合ったビジネスで成功するはずだ。ビジネスでの成功は社会や他人へ
の貢献のエネルギーの大きさによって決まるわけだから、そこをぶれずに前
進していけばいい。

このように長文にはなるが、単に、「私はビジネスで成功して月収300万
円を取る人間になった」というような従来の構文でのアフアーメーションと
は全く異なり潜在意識を通過しやすくなるのである。

しかしながら日本語は、アフアーメーションにくい言語であるために、
これにも対応をしていかなければならない。その方法としては、ヨガや丹田
呼吸、座禅、瞑想、そして高周波の音（自然の音）や高周波音楽（モーツァ

ルトの曲など)を聞くといったことを日常に取り入れることで高周波脳に訓練していく方法が考えられる。つまり、脳や心をリラックスさせている状態であり、祓う、空、無、中今、ゼロポイントフィールドといった概念にも通じ、「成功」や「願望実現」のためには、こぞつてこのようなことを行いなさいとされているのである。

ただ問題は、これだけ慌ただしい現代社会の中で日々こういった時間を確保に取ることができるかどうかである。これは多くの人にとって難しいのが現実ではなからうか。

ワープする成功と願望の実現方法

† 成功するためのファイナルアンサー

さて、ここまでの話を読んでいただき、いかが思われたでしょうか。

スピリチュアルの世界では、ことあるごとに（意識の）周波数を上げることとをいわれているが、周波数が上がると自分の思いが実現しやすくなるからである。ただ、周波数が高い人になるということは、意識が「個」から全体を俯瞰できる「公」や「貢献」「使命」を理解できる人間になるということでもある。

別の言い方をすれば、周波数が高い人は言霊という「エ」（実践知）、「イ」（創造意志）の領域にアクセスできる人ともいえよう。このような状態になったとき、人は目先の欲や見栄、拡大、二項対立思考といったものを超えていけるのだ。より高い視点から自分の本当の成功に気付き、今世でやるべきことを実現させようという思いに意識も次元上昇していく。

そして、この状態になると不思議と思いは叶いやすくなるのだ。これは量子力学でいう、ノンローカル（非局在性）なコミュニケーションを行える能力が高くなるからであろう。

つまり、自分がやるべきことに必要な情報がどこからともなく入ってきたり、必要な人と知り合いご縁を持てたりすることが頻繁に起こってくる。これは欧米系の成功法則や願望実現方法のように、憑かれたようにビジュアライズしたり、アフアーメーションしてやって来るのでもなく、自然な形で受け取るように入ってくるのが特徴である。

僕は闇に突き落とされ、数年間もがきまわった中で、欧米系のメソッドにあるような、憑かれたように思いを発し続けることを本能的にやめ、ホ・オ

ポノポノを皮切りに古神道や言霊の叡智と出逢いから、とにかく全てを被い、ゼロポイントフィールドの状態を目指したのである。

すなわち何かをつかもうとすることもなく、何者かになろうとすることから自由になり、思いや願望、問題解決をしたいことを階層的な視点で組み直した後、ひたすら空（くう）に意識を向けたのだ。

すると今まで膠着して一向に好転の兆しを見せることがなかった人生が、自分でも確実に自覚できるほど変容をしはじめたのである。過去最も得意としていた目先のテクニクで簡単に儲かるようなオイシイ話にも心が動けなくなり、欲とお金が好きで、平気で嘘をついたり、嫉妬心や悪意を持った連中がきれいにいなくなり、全く正反対の素晴らしい人達との出逢いが加速度的に増えていくなどの現象化が生じ、結果、視界が急速に開けていったのだ。

こんな話をする和一氣にオカルト色が強くなるように感じるかも知れないが、僕は最大効率効果を重んじるビジネスマンである。日本語が強力なエネルギーを帯びた願望実現言語であることを理解したとともに、自分の意識ゾーンを上げ、周波数のもっとも高い状態、すなわち言霊額でいうところの「イ」（創造意志）の状態に登り、ゼロ、空、無、中今、ゼロポイントフィールドの状態から、思いの意図を発信することが最も強力かつ最速、そして最大の効果を得られることを悟ったのだ。

つまり、このファイナルアンサーとは、僕たちが今まで学び実践を強いられた数多くの成功法則とは真逆のところに位置しているものだった。

実はさらに効果的に最大化する方法も存在する。ここでは誤解を招きかねないため書き述べることは控えるが、現代では最先端の理論や科学的手法に

よって瞑想や座禅といったアナログ的な方法だけに縛られず、最新手法を自分の人生に取り入れていくことも効果的な方法であると僕は確信する。

僕が長い道のりの中で、右顧左眄しながら必死に辿り着き、実際に実践している、この叡智を「和の成功法則」という名称において多くの皆さんに知っていただき、学んでいただきたいと切に願わずにはいられない。

それほど、『和の成功法則』は日本人（のDNA）に適している。

さて、いかがだっただろう。どう感じていただいただろう。
僕はこの場で自分の頭の中にある全てを公開し切れてはいない。

しかし今、若者をはじめ、多くの日本人が日本回帰をし始めているように感じるのは僕だけではなからう。靖国神社への参拝数の増加をはじめ、（何度もうが、僕は右傾人間ではなく単なるデータを伝えているだけである）書籍にも日本の真の歴史や古事記などを扱ったものも増えている。

あきらかに意識下で何かを感じ始めているのではなからうか。

あなたもそうであるならば、『和の成功法則』を学ぶことを、ぜひオススメしたい。

体得した暁には 欧米系の成功法則や願望実現法では、決して開けることが
できず頑に閉じられていた、**あなたにとっての真の“成功の”世界が
目の前に展開されるであろう。そして、それをきつと掴むことがで
きるはずである。**

和の成功法則で運用する人生

↑ 目の前に広がる、心のエメラルド・オーシャン

僕は今、とても穏やかな日常を送っている。30代前半の頃、目の色を血走らせて、「成功」と「お金儲け」、そして「何者かになるということ」に憑かれて走り抜けていたときは雲泥の差である。

僕のようにビジネスの世界に身を置く者は、通常は自分の会社の年商や自分の収入に常に意識が向くのが当然であるし、ライバルへの競争心、さらに上に行く人への憧れと嫉妬心などを生じてイラついたり、苦しんでいる人も多いはずだ。また日常生活でも、自分と他人を比べる行為から意識を解放できない人も数多いように思う。しかし、僕はこれらの意識が完全に消え去ってしまった。

他人からの批判、批評、嫉妬などのネガティブエネルギーをはじめ、物事の紛争が生じてても以前のようにそこに感情が張り付くことも無くなった。これは意識周波数の調整能力が開花し、ネガティブなことも瞬時に無力化できるようなことで、起きている事象の階層視ができるようになったからに他ならない。また、他人の成功を心から喜べるようになったり、己が我がが、という感情も溶解し、自分が関わってくださっている人達にどのような貢献ができるのだろう。といった感情のほうに先に立ち上がってくるようになった。

すると不思議なことが、いとも簡単に起きてくるようになったのだ。

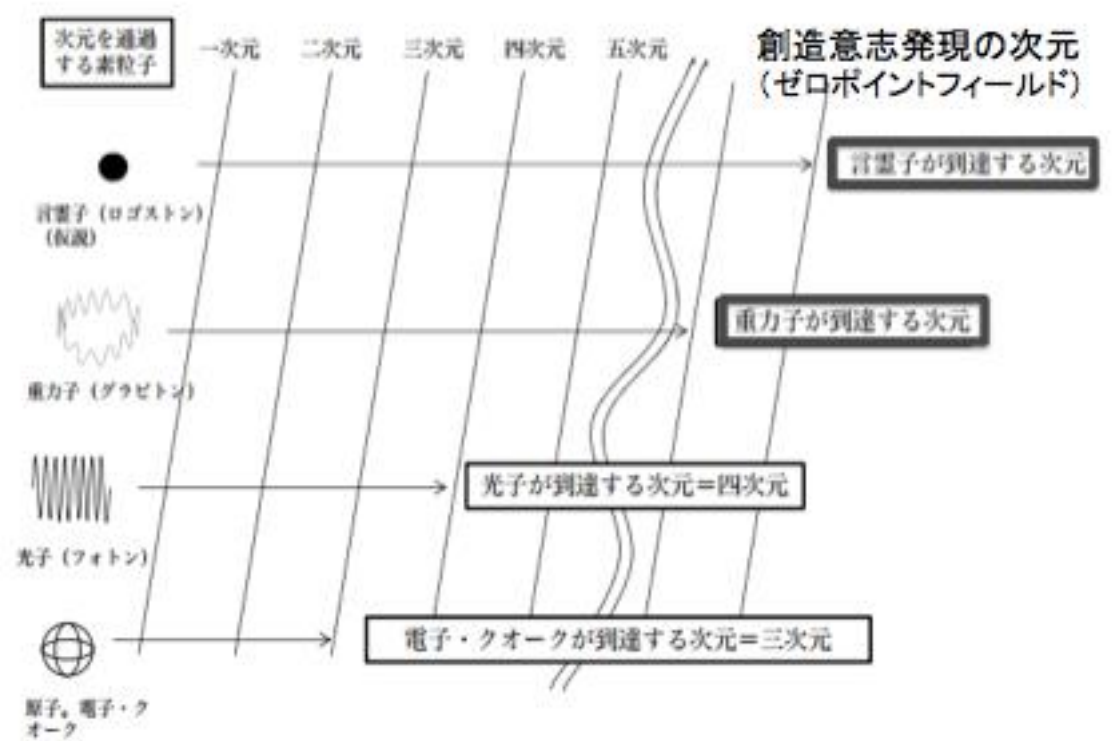
信じていただけないことを前提に書くが、意図したことに必要な情報、モノ、人といったものが、ほとんど苦勞なく波のように現象化して、**起こることが起き続けて来たのだ。**

言霊や古神道の概念に、「未来も過去もない、ただ永遠の今があるのみ」という言葉通り、**物事の実現や問題解決があり得ないスピードで処理されていくのである。**

理論物理学者エドワード・ウィッテン（現プリンストン大学高等研究所教授）が1995年に提唱したM理論（宇宙構造の最終仮説といわれている）という説によると宇宙は11次元で構成されているという。この11次元に対し、言霊研究の権威によると言霊のエネルギーは11次元まで到達するという。

そして、この次元まで情報を到達させることができると、瞬時に創造意志の働きが動きださせることができるのだという。

※ M理論参考 <http://ja.wikipedia.org/wiki/M%E7%90%86%E8%AB%96>



信じる信じないはさて置き、目に見えないからそれが無い、あり得ないというのはいささか早計である。僕らが五感で感知できる情報は、ほんの一部であり、犬には聞こえる音も人間には聞こえないし、X線やラジオの電波も僕らの目には見えないのだ。だが存在する。だからゆえに1次元や言霊というものが絶対に存在しないということにはならないと僕は思っている。

さらに驚くべき話をしたいと思う。

農家の方が読む雑誌『農業経営者』の二〇〇六年〜二〇〇七年にかけての連載記事で、言霊を使った害虫駆除の実験をした成果の記事が書かれているのだが、何と言霊のエネルギーを送った区画だけ

翌日になると害虫（バッタ）が全てミイラになって死んでいたのだという。これは言霊波のエネルギーがバッタの生体に作用をしてのことある。



ミイラ化したバッタ（実写）

そもそもこういった形での言霊エネルギーの活用の仕方は宇宙原理に反するが、一度きりの限定実験ということで引き受けたそうだ。また、言霊を使って天候を操作するなども、実はそれほど難しくはないのだ。なぜならば宇宙に存在する全てのものは振動しており、その振動に同調させてしまうことで意図した作用を及ぼすことができるからだという。

もちろん、人間の身体の細胞も意識もすべて振動している。この固有の振動に対し、同期化したり、ブロックしたり、増幅できるとすればどうだろう？

もっと簡単にお伝えしよう。例えば、あることを成し遂げたいと思っていたとする。しかし、自分の経験やリソースでは、それを成し遂げるには心許ない。

こんな経験は誰にでもあろう。僕もこのような事態を年に何度も経験する。しかし、これを解決する経験やノウハウを持つ人はどこかに居るのだ。

ならば出逢ってしまえばいい。

和の成功法則及び言霊を活用できるようになると、不思議なことに、必要な人とは適切な時期に出逢うし、自分にとって不必要な人は揉めることもなく自然に居なくなってしまう。

嘘だ、信じられないと思う人も多いだろう。しかし、僕や僕の周りの人は頻繁にこのようなことを体験しているのだ。体験し過ぎてもはや日常的な出来事になっている。

僕は占い師でもなく、スピリチュアルな仕事をしている人間ではなく、シビアに数字やビジネスの駆け引きに追われるビジネス界の人間である。天使からメッセージも聞こえなければ、幽霊も見えない普通の人間である。しかし、ほとんど意図したことがその通りになってしまうため、

僕に限っては、すでに「ある」ことが前提の人生運用をしている。

つまり、人生にとって必要な願望は叶ってしまうし、解決したい問題は最良の形で解決されてしまうのだ。

正に、和の成功法則恐るべしである。

こうなると、日常はキラキラ煌めくエメラルドグリーンに彩られていく。なぜならば誰とも比べる必要もない、**自分の本当の人生を生きることができるからだ。**

人生は、「運」「縁」「センス」である

↑ いびつな人生ゲームから降りて本当の生き方をしよう

僕がリスペクトしている人で島地勝彦さんという人がいる。この方は、週刊プレイボーイ、月刊プレイボーイの編集長などを歴任し、集英社役員を経て、集英社インターナショナルの社長にまでなった人である。今では、突き抜けた生き方をしてきた経験を活かし、『サロン・ド・シマジ』という粋を極めた、お店をプロデュースしている。

参考：https://www.shiseido.co.jp/gb/shiseidomen/salon/chefs_2/01_3/

彼は言う。

人生は、「運」「縁」「センス」だと。

的を射たり。僕も激しく同感する。

己の経験や能力、リソースなんてたかが知れているのだ。

自分の本当の人生を生き切る、自分にとって最良の成功をするためには、「運」と同調する魂を持つこと、「縁」を適時に得られる意識周波数を高めること、そして、物事を選ぶ審美眼といった「センス」が必要なのだ。

多分、この「和の成功法則」の概念の断片を受け入れてくれた人もいれば、そんなことあり得ない、嘘だと批判的に捉える人もいるだろう。

あなたが、どう捉えようが僕には知ったことではないが、その思考の立ち上がりこそが、あなたの「センス」である。何を選ぼうと、何を棄てようと、何を信じようと、何を否定しようと、全て、あなたのセンスである。

僕も含めて、今までの人生における「運」「縁」「センス」が、今の自分の状態なのだ。

人生は、「運」「縁」「センス」

これは人生を運用していくための要（かなめ）の言葉である。

この冊子と「ご縁」を持っていたいただいたあなたには、この三つの言葉の最良の運用をしていただきたいと願って筆を置かせていただきたいと思う。

「祓いにはじまり、祓いに終わる」

この意味が本当に理解でき地肉となったとき、あなたの人生は大きく変わるであろう。

おわりに

「勝ち組」「負け組」という言葉が流行って久しい。

経済的な勝ち組と負け組、恋愛や結婚での勝ち組と負け組など、このキーワードは二元論的にスパッと人の人生での立場を斬ってしまうことから、多くの人達に強迫観念を植え付けてきた。

そのため、この国のあちらこちらで、いい人生を生きるためにどうすればいいのか、いかに稼ぐのか、いかにモテるのかといった教えが増殖している。人より即物的なことで優位にいることは、本能的にも脳みそに組み込まれてしまっていることなので、それを追い求める気持ちは理解できないことではなく、僕自身も過去、そういったものをがつつり追い求めて来た人間であるため、さらさら否定する気持ちはない。

しかし、心は瑞々しさを保ち、本当の自分の人生を生きている確信は得られているであろうか？

戦後、日本人は欧米思想の影響を多大に受け、常に何かをするように求められ、否、仕掛けられ、何者かになるように押しつけられて来た。必死に頑張り、自己実現という名のスローガンを掲げ、仮に経済的成功、地位的成功、自由人という名の時間的成功を勝ち得たとしても、混沌とした現代社会においては、この先の人生への確信を持てている人は少なく、心の休む暇のない状況から逃れられないでいる。

また、こうした不安への解消法として、さらなる知識の蓄積、心酔するメンターへの依存、物質的な所有などの形となって溜め込まれ、自分を防御し、あるいは満足させようとしている。つまりは自分に何を蓄積していくかがベースとなっている。

しかし、武術の達人といわれる人の身体運用のごとく、本当にその道を極

めた者は蓄積ではなく、一切の無駄（な動き）を削ぎ落とし、「空」そのものになれるかどうかである。そして、「空」から先を一瞬にして展開できるかである。

西洋的な学びや成功への道が蓄積と向上を基底とするならば、和の成功法則は真逆であり、蓄積したものを全て削ぎ落した後から本当の学びが始まる。

積み重ねた、「積み」を「罪」とも表現できるそうである。すべてを削ぎ落した後に残る、「空」の世界に立ち入ってこそ、新しい視界と真の成功が手に入るのだ。

そして、「空」から後の世界を運用・展開できる叡智こそ、和の成功法則であり、あなたの思いや願望実現、問題解決に対して大いなる働きをしてくれるであろう。

さらに今回僕は、すでに「勝ち組」となり「成功」している人にも提言したいことがある。

インターネットが発達し、自由なスタイルで効率良くお金を稼ぐことができる時代になり、こうした時代の流れに乗って人が羨む状態を手に行っている人もいよう。また、会社を急成長させるなどで株式公開や会社売却を果たし、相当な資産を手に入れ、一生働かなくてもいい状態の人もいるだろう。

こうした人達は、「労働」から解放されるため、リタイア、セミリタイアといったライフスタイルを送っておられる人も多いはずだ。しかし、こうした人達こそ、一定期間そのような状態を楽しんだら、ぜひ、「意識的なリーダー」になって欲しい。

なぜならば、人はこの世にお金儲けをしに来ているのではなく、世の中や他人に自分の能力やリソースを命一杯使って貢献しながら意識を成長させに来ているのである。自分が手に入れた自由でお金のあるライフスタイルを、それに憧れる人達に、「このライフスタイルいいだろう」と単に披露するのはなく、人として真に成長することを支援してあげて欲しいと思う。これは

自由とお金を手に入れた者の次の務めである。

実際、こういった状態にある人でも、この意味を何となく理解できる人も多いのではないか。僕もこういった状態になったときに非常に乾いた気持ちになった経験がある。

ある人の言葉で感銘を受けた言葉をお伝えしよう。

「人は勝ち組になることがカッコいいとは限らない」

「平然と損が出来る心を持っている人こそカッコいい」

人に愛され語り継がれていく人とは、「勝ち組」や「金持ち」になるための計算や手法ばかりを追いかけて優越感に浸っている人ではない。人生という限られた舞台で、馬鹿なことや、損をすることも含め、粋な背中を見せることができる人である。

アメリカでは、リタイアした後、どのように生きたらいいか、どのように社会と関わるべきかといったテーマを扱うセミナーもあるくらいだ。「労働」から解放された者としての務めの本当の意味を理解していただきたいと願わずにはいられない。

石崎絢一 拝

2016年に向けて、さらなるメッセージ

この冊子は、2014年度に書かれ、今回少し加筆修正したものである。ほとんど手直ししておらず、それはすなわち、この冊子にてお伝えしたいことは、ほとんど前回で書いてしまったことを意味している。この先、さらに興味関心のある方は、言霊の学び『和の成功法則』に足を踏み入れていただきたいと思う。そこには、あなたの想像を超えた世界が待っていることを保証しよう。

加えて、僕自身のことをいえば、ネット上で大勢の前に顔を出し、誹謗中傷・批評批判などのリスクも負いながら、このような活動を行わずとしても、自らのビジネスだけを追求する道もあるのだが、これは僕の使命であり、見知らぬ誰かの主観で何をいわれようとも、やらねばならぬことなのである。これもご縁をもつていただいた方にはお伝えしている。ビジネスパーソンとしてビジネスで稼ぎ、適切に拡大し、儲けることが本来の僕の仕事なのだが、時間を割いて、この活動を行っている。

単なる伝導活動に留まらず、今後は学んだ方々との事業が幾つも準備されており、その一つが農業である。といっても普通の農業ではない。この肉体次元でしっかりと成功ができる農法にて運用を行うことになっている。

面白いもので、使命に基づく動きをすると、すべて必要なパーツ（ノウハウ、資金、人、人脈など）が瞬時に現れ出て来る。武術の達人が、すべてを空にしたときに、最高の術を手にするかの如く、この4次元（3次元+時間の空間）で、強い者の動きに翻弄されている多くの人達を、この次元に捕らえることなく、真の人生を展開できる意識階層への進化のサポートに貢献尽力していく所存である。

この次元での強い者に対しても、視点を変えようと、意識状態が粗放な者と見ることもでき、これらのエネルギーを躲すことも可能なのだ。そういったことを単に知識レベルで理解するのではなく、現実創造できるレベルにまで

到達するようになると、この世に生まれてきたことが実に楽しくなってくる。この叡智は人間生活のあらゆる活動に反映可能であり、ビジネス、恋愛、人間関係、心身の問題などの解決・適正化に大きな力を発揮することであろう。

言霊を理解し、使うことができるようになると、『自由自在』の人生が展開されることは間違いないことであり、“**どうせ**”思うように生きることができるのだ。否、人間とは本来、創造意思そのものであり、自由自在の存在であるわけであるから当然のことである。

僕はビジネス界の人間であるが、僕の周りの人達は、この学びを通じて、収入の拡大や成功を成し遂げていつている。成功とは自分の力で勝ち取るもの。これは力強い言葉であり正論ではあるが、その強い意気込みの対局にあるところに本当の成功の秘術はあることを知っていただきたい。

僕は、ビジネス界の人や自己啓発をバリバリやって来ている人にこそ、この叡智を学んでいただき、そのパワフルなエネルギーでさらなる成功や、この国の人達の意識的リーダーになっていただきたいと願う。スピリチュアルな人達も、自分の癒しや、つながりなどといった枠から出ていただき、もっと現実世界・肉体次元で活躍していただきたいと願う。美しい心や地球を思う気持ちをもって日常を清らかに生きることがいいが、それだけでは何も、この次元は変わらないのだ。

最後に、30代前半の頃、僕と一緒に大金を稼ぎ、その後崩壊し、10年以上に亘り、苦しみ抜いてきた友人の話であるが、今、僕達のある会社の執行役員として活躍していただいている。素晴らしい能力を発揮していただいているので、今後この会社は大きく利益を出していくことになる。そして、実質経営を任せている彼にも大きなリターンが行われることになる。僕は彼が復活してくれることを心から願っていたのだが、彼も言霊を人生に取り入れたことにより、大きく人生が変わったと実感していた。

言霊とは、今の現実を適時に変える力を持っているのだ。皆さんとの今後のご縁を期待して筆を置きたい。

石崎絢一 拝

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

ぜひ、本書の学び、感想をお寄せください。

石崎先生もすべて拝見させていただきます。

本書の感想はこちらのページのコメント欄へお願い致します。

↓
http://the-warp.jp/session/?page_id=81

また『和の成功法則』の動画セッションは、
左記より視聴可能です。

本冊子と動画セッションをあわせて
吸収していただくことで、『和の成功法則』がインストールされます。
まだご覧になっていらっしゃる方はいない方はぜひご覧ください。

▼『和の成功法則』セッションはこちら

↓
http://the-warp.jp/session/?page_id=7

そして、ご覧いただきましたら、ぜひ、コメントをお願いいたします！

コメントいただいた方には、感謝の気持ちを込めて、

石崎さん・大野さん・柳田さんが3人で寄せ鍋を食べながら、

この1年の、プロジェクトの軌跡を語ったセッションをプレゼントいたします。

コメントも、コメント特典も、こちらのページよりお願いいたします。

↓
http://the-warp.jp/session/?page_id=7

